

人類学博物館紀要 第 32 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 32 号

南山大学人類学博物館

2014

目 次

巻頭言

人類学博物館のリニューアル

..... 黒沢 浩… 1

アウフェンアンガー師のセピック河流域調査と
人類学博物館所蔵資料について

..... 竹尾美里… 19

南山大学人類学博物館所蔵の陶俑

..... 西川由佳里… 27

新たに寄贈されたバンチェン土器
——山口由子氏コレクション——

..... 西江清高・黒沢 浩… 35

巻頭言

2013年10月4日、人類学博物館はついにリニューアル・オープンを果たした。全面的に展示物に触ることができるユニバーサル・ミュージアムをコンセプトとした博物館である。開館以来、多くの人が来館し、博物館関係者の注目度も高い。

しかし、このリニューアル・オープンは当然ながらゴールではない。本当の博物館活動はここからスタートしていくのである。そこで、今後、人類学博物館が進むべき2つの方向性について述べておきたい。その二つとは研究と教育である。いずれも博物館の必要条件であるにもかかわらず、これまでの人類学博物館に最も欠けていた点といえる。

博物館における研究は、大きく博物館学的な研究と資料研究に分かれるが、当面は資料研究に重点をおいて研究活動を展開したい。具体的には、民族誌資料・民具・現代生活資料を含めた、資料の実測図化である。実測図は考古学の領域ではごく普通に作成しているものであり、いわば考古学研究のベースにあたるものである。だが、考古学以外の分野では残念ながら考古学と同じ精度の実測図の作成はまだなされていない。

物質資料の研究は、第一に資料からどのようにして、どのような情報を引き出すか、ということにかかっていると思うのだが、それを端的に示すのは実測図の精度である。言い換えれば、実測図のレベルはその分野での物質資料研究のレベルの反映であるといえる。博物館を中心とした南山大学の新しい人類学研究を切り拓いていく道を、まず実測図に基づく研究を推進していくことに求めているのである。

二つ目の教育であるが、当面次年度内をめどに学習プログラムの策定を行っていききたい。最近、美術館では作品の鑑賞プログラムなどが盛んに検討され、実践されるようになってきたが、歴史系博物館では相変わらずの体験型学習方式と物語的講座物に終始しているように見える。もちろん、ニーズがある以上、それが無駄だとは言わないが、こうした試みだけでは博物館離れ—特に歴史系博物館の—を止めることはできないであろう。

ここで確認しておきたいのは、博物館における学習プログラムは、資料に関する十分な研究をベースとしなければならない、ということである。博物館側の資料に関する理解が深まれば深まるほど、多様な学習プログラムの展開が可能になる。博物館は、その豊かな収蔵資料を教育のための原資としていかなければならない。

博物館の機能は、この2つにとどまるものではない。しかし、今、博物館に求められている役割としてこの2つのことは非常に大きいし、また、ここに力を入れることで博物館は面白くなる。

新生・人類学博物館はそこから始まるのである。

2014年3月
南山大学人類学博物館

人類学博物館のリニューアル

黒沢 浩

はじめに

2013年10月4日の午前中は、不自然なくらい静かだった。午後に起こるであろう嵐のような時間を予期してのことだったのかもしれない。この日は、人類学博物館がリニューアルし、そのオープニングのセレモニーを行う日だったのである。

今回のリニューアルまでの道のりが長かったのか短かったのかは、今の時点では何とも言えない。しかし、リニューアルするまでの経緯をまとめておくことは、南山大学の歴史の1コマとして意味があるだろうし、博物館を作るプロセスを記録しておくことは、重要な仕事であると考えている。

1. 人類学博物館略史

リニューアルについて記す前に、人類学博物館の歩みを簡単にまとめておきたい。

人類学博物館誕生からの経緯については、すでに一度まとめているし（黒沢2007）、大学史料室による南山大学の人類学に関わる史料集も出されている（南山大学史料室2011）。

人類学博物館は、1949（昭和24）年9月に設立された南山大学附属人類学民族学研究所の陳列室を前身としている。この年は新制大学としての南山大学が発足した年でもある。

1964（昭和39）年に南山大学が現在の山里町に移転するのに伴い、研究所およびそ

の陳列室も移転してきた。このとき、陳列室は現在の図書館地下1階に置かれ、1973（昭和48）年に図書館の3階に移転した。そして、1983（昭和58）年にG棟地下に移転し、今回のリニューアルまでそこにあった。1967（昭和42）年には、学内での博物館実習を行うために、博物館相当施設に指定された。

その間、陳列室—博物館に関わった教員も、中山英司氏、小林知生氏、吉田章一郎氏、重松和男氏と変わり、また、人類学科—人類文化学科の教員として南山の卒業生でもある伊藤秋男、早川正一の両氏が博物館の運営に関わりをもっていた。人類学博物館の歴史は、こうした先達による調査と、その結果としての資料収集の歴史であったといっても良い。

さて、先に人類学博物館の歴史は資料収集の歴史であると述べたが、今日人類学博物館に収蔵されている資料は、大きく4つのカテゴリーに分けることができる。一つは、G. グロート神父、J. マリンガー神父、そしてH. アウフェンアンガー神父など神言会の神父たちによって収集された資料群、二つめは中山氏から伊藤氏・早川氏・重松氏に至る歴代の担当教員と人類学科所属教員の調査によって収集された資料群、三つめは博物館に寄贈された資料群、そして四つめは民具と重松氏を中心に収集が開始された昭和の生活資料である。この4つ

のカテゴリーは、リニューアルした博物館の展示構成にもなっている。

こうして収集された資料は、その全てが学術的に価値のあるものと言える。グロート神父の資料は、日本考古学研究所で発掘調査した関東地方の縄文時代貝塚の資料が中心であり、マリンガー神父収集資料は、フランスを中心としたヨーロッパ、アフリカ、アジアの旧石器時代資料、そしてアウフェンアンガー神父収集資料は、布教活動に入ったパプアニューギニア北部の低地帯（セピック川流域）の民族誌資料である。

調査資料としては、田原市保美貝塚・名古屋市瑞穂遺跡・同市高蔵遺跡（D 地点・夜寒地点）等の愛知県内を中心とした考古学的調査によるものと、1964 年に行われた戦後初の科学研究費による海外調査であった「東ニューギニア学術調査団」によってパプアニューギニア高山地帯で収集された民族誌資料などが含まれている。その後、人類学科の教員であった倉田勇氏、坂井信三氏らによる収集資料も加わった。

寄贈資料にも考古資料と民族誌資料とがあり、前者では伊藤氏によって報告された名古屋市大須二子山古墳出土品、後者として上智大学より寄贈されたタイ北部山地民の民族誌資料がある。大須二子山古墳は現在の名古屋スポーツセンターの場所にあった前方後円墳で、全長は 100 m を超えるものと推定される。戦後の道路の拡幅工事やスケートリンクの建設によって完全に消滅した。人類学博物館に収蔵された出土品は工事の際に工事関係者や地元研究者によって回収されたものである。なお、一部は名古屋市博物館にも収蔵・展示されている。2009 年に名古屋市の文化財に指定さ

れた。

一方、タイ北部山地民の民族誌資料は、上智大学の白鳥芳郎氏を中心とした「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」による収集資料である。この資料が南山に移管された経緯については、重松氏による記録が残されている（重松 2004）。それによれば、調査団員であった量博満上智大学教授が定年退職されるにあたり、博物館施設を持たなかった上智大学では資料を保管できないことから、同じカトリック系大学であり、かつ白鳥氏が人類学研究所の特別研究員をしていたという経緯によって、量氏より人類学博物館に受け入れの打診があったという。移管は 2000 年の夏に行われた。

その後、最も大きな単位として寄贈されたのは、埼玉県鶴ヶ島市が保管していたオセアニアの民族造形品のコレクションであった。2009 年のことである。このコレクションは、新潟県塩沢町（旧石打村）の出身で、石打村長まで務めた今泉隆平氏（故人）が、東京で「パシフィック・アーツ」という民族造形品などの輸入販売を手がけていた会社を経営する大橋昭夫氏を通じて収集したものであり、収集の経緯については大橋氏の文章に詳しい（大橋 2005）。

このコレクションは塩沢町と鶴ヶ島市で保管していたが、鶴ヶ島市ではこのコレクションを然るべき学術機関に移管することにし、本学人文学部教授でオセアニアの人類学を専門とする後藤明氏に南山での受け入れの可否について打診があった。しかし、その量は極めて多く、小学校の教室 4 部屋分以上にもなっていたため、単独では無理であると判断し、南山と早稲田大学・天理大学の 3 大学で協議のうえ、分割して

移管することにしたものである。南山ではメラネシア地域の島嶼部を中心に約 260 点の民族造形を受け入れた。

最後の民具や昭和の生活資料については、重松氏が教育目的で収集を開始したものらしいが、今日では人類学博物館収蔵資料の中で最も人気の高いものとなっている。

このように、人類学博物館は資料の収集（調査を含めて）、整理、展示ということに特化して活動してきたと言える。そしてその成果は「南山大学人類学博物館館報」や「人類学博物館紀要」などで随時公開されてきた。また、博物館実習も博物館で行うなど、大学博物館としての役割を果たしてきた。だが、今日の大学博物館にはそうした学内向けの活動だけではなく、社会に向けた活動が求められている。そうした観点に立ったとき、これまでの人類学博物館の活動はそうした情勢に対応したものではなかったのである。

2. 人類学博物館の改革

(1) プロジェクトチームと人類学博物館規程の制定

筆者は 2004 年に南山大学に赴任したが、大学での職務の一つは、重松氏の後を引き継ぎ、博物館を運営していくことであった。そしてその年、大塚達朗人文学部教授を座長として「博物館のあり方に係るプロジェクトチーム」が立ち上げられた。その構成は、黒沢、横山輝雄文学部教授、吉田竹也人文学部助教授（当時）、加藤隆浩外国語学部教授、松戸武彦総合政策学部教授、そして当時の人類学博物館特別嘱託であった後藤真里氏、安藤さおり氏（現高浜市かわら

美術館学芸員）であった。そして、10 月には「南山大学人類学博物館の将来計画と必要措置」と題した答申を大学に提出した。その結果、人類学博物館規程が定められ、教学担当副学長による館長の兼務、博物館担当教員の配置、博物館運営委員会の設置が決められて、2005 年 4 月より施行された。また、運営委員会規程も制定され、そこには運営委員会の事務を担当するものとして博物館事務室が明記された。この規程には博物館事務室の業務内容は書かれていないが、組織上、事務室は教育研究支援事務室によって管掌されることになった。

(2) 新たな博物館活動

この規程制定後の初代館長には、当時の教学担当副学長であった浜名優美総合政策学部教授が就き、博物館担当教員には黒沢があたって、同時に運営委員会委員長も兼務することになった。博物館の実質的な仕事を担当する職員は特別嘱託 2 名、臨時職員 2 名であった。

人類学博物館の活動方針については、二つの選択肢があったと思う。一つは将来の本格的な活動に備えて、当面は資料整理等に専念すること、もう一つは、一般向けの事業を行い、人類学博物館の存在を知ってもらうようにすること、である。そして、われわれとしては知名度を高めることを優先し、いくつかの企画を実施することにした。実施開始時期は必ずしも一致しないが、博物館講座、フィールドワーク「東海の遺跡を歩く」、企画展などである。その結果、こうした行事の参加者がリピーターとなってくれたのは予想外の「うれしい誤算」であった。

また、授業では博物館実習を恒常的に博

物館で行い、1年かけて学生に展示を制作させることにしたが、これによって学生の関心が博物館に向いてくれるようになった。さらに、2006年からは名城大学附属高校との学習連携が始まり、所蔵資料を活用しての教育プログラムを考えていくきっかけとなった。

(3) オープンリサーチセンター

そして、2006年からは5年計画で、文部科学省の補助事業である「オープンリサーチセンター」事業がスタートした。このプロジェクトでは「博物館部会」「情報部会」「考古部会」「人類学部会」の4部会を設定し、人類学博物館の博物館としてのあり方の検討、博物館資料の研究などを行った。

特に大きな成果として上げておきたいのは、マリンガー・コレクションの整理と、保美貝塚の整理がそれぞれできたこと、大須二子山古墳の推定全長を算出することができたこと、タイ山地民の現在の生活の様子が調査されたこと、そして、人類学博物館の歴史の一端を明らかにすることができたことなど数多くある。いずれにしてもこれらの研究成果がなければ新・人類学博物館の展示を構想することができなかったという点で、非常に大きな出来事であったと言える。

3. 人類学博物館リニューアル計画

(1) リニューアル計画が決まるまで

人類学博物館をリニューアルしようという計画は何度か持ち上がった。その中で現実味を帯びた話としては、旧第一食堂があった学生会館への移転であった。第一食堂が現在のC棟に移転した跡地に人類学博物館と大学史料室を置くという計画であ

る。しかし、リニューアルにかかる費用の試算からこの計画は実現が難しいことが判明し、立ち消えとなった。

そうした中で急浮上したのが短期大学を短期大学部として名古屋キャンパスに移転するに伴い建設されることになった新校舎・R棟地下部分への移転であった。この計画が博物館へ打診された際、博物館がそれを受け入れるべきかどうか判断する最大の問題は地下にあるということであった。一般に地下は湿気がこもりやすいため、展示室および収蔵庫の環境管理が難しいとされる。しかし、この移転計画を断ったところで、次のチャンスがいつ訪れるかはわからなくなってしまふ。そのため、博物館としてはこの新棟建設計画に人類学博物館の移転およびリニューアルを盛り込んでもらえるよう、大学に要望することにしたのである。

2009年6月には青木清館長（教学担当副学長）と黒沢との連名で「新棟建設に伴う博物館の移転と設置についての要望」を新棟建設委員会に提出し、さらに7月には「新棟地下の博物館に関する要望」を同委員会宛に提出した。

(2) リニューアル計画のスタート

人類学博物館の移転・リニューアル計画は2009年よりスタートしたが、2009年7月には、「南山新校舎博物館質疑への回答」として黒沢が新博物館のアウトラインを提示している。その文書では、①博物館の運用について…管理および必要な施設と動線、②必要諸室とその空間的な仕様、③必要諸室とその設備的な仕様、④博物館の計画にあたって外部の業者を使う予定、⑤その他…博物館開館までのスケジュールの確

認、などが述べられており、新博物館の基本的な考え方がここに示されたと言える。

そして、2009年12月には黒沢の名前で、「人類学博物館のリニューアルに関する作業部会について」と題した作業部会設置の要望についての起案が出された。その目的は、施設・設備面における基本的な考え方を検討することであり、構成員としては黒沢を部会長に、大塚達朗人文学部教授、後藤明人文学部教授、永井英治人文学部准教授（当時）、そして職責上、近藤幸文総務課長、東誠教育研究事務室室長（当時）が加わった。

第1回目の作業部会は2010年2月1日に開かれた。この会議では、黒沢からこれまでの経緯と現在の状況の説明がなされ、今後のスケジュール、作業部会での検討事項と期間、新博物館の施設についての原案が提示された。この中では特に、博物館とともに移転する予定であった大学史料室が新棟には入らなくなったこと、当初提示された床面積1000㎡が700㎡に縮小されたこと（実際には830㎡確保）、そして、ふた夏の「枯らし」期間を設けることが承認されたことなどが報告された。

この作業部会は、2010年7月の第7回作業部会まで継続し、2011年度の個別事業計画として新博物館の移転・リニューアルを起案するための計画を作成した。一連の作業部会の中での議論の中心は、新博物館の施設設備およびそのスペックだけでなく、移転とリニューアルに関する業者選定、費用の設定が大きな課題であった。そして、業者の選定はプロポーザル方式にすることとして大学執行部に提案し、その方向で承認してもらった。

(3) プロポーザルによる業者の選定

博物館建設のような事業に関する業者選定には、通常コンペティション方式（いわゆるコンペ）、競争入札、そしてプロポーザル方式がある。コンペ方式は設計案の良否による業者選定、競争入札は費用で設計者を選定する方式であるが、今回は建物自体が既存のものになること、そして博物館という施設の性格上、金額だけを業者の選定基準とはできないという理由から、プロポーザル方式を採用することにした。プロポーザル方式とは、一言で言えば、当該設計に対して最も適格な設計者を、その経験・実績・能力に基づいて判断する方式である。この方法は、今回のように博物館の担当者（学芸員等）と設計者が協議しながら、その館のミッションや目的、そして将来構想まで含めた博物館側の意向を実現する上で望ましい方法であるといえる。

また、プロポーザルを行う場合、公募する場合と指名する場合とがあるが、今回は指名型とし、展示業者大手3社に通知した。結果的には1社が降りたため2社を対象とした審査となった。参加した2社には、事前にプロポーザル説明会を行い、新博物館の基本方針を伝え、参加仕様書の配布を行った。

審査には学内より青木館長、黒沢、そして建築の専門家として高橋洋子数理情報学部教授が入り、オブザーバーとして波田一夫学園施設課長、奥村良和大学施設課長が加わった。また、審査の客観性を確保するため、荒井信貴氏（岡崎市美術博物館）、可児光生氏（美濃加茂市民ミュージアム）、井口智子氏（名古屋ボストン美術館）の3氏に外部委員として参加をお願いした。

プロポーザルのプレゼンは、2010年10月18日に行われ、同日中に審査委員会が開かれた。その結果、最優秀提案者として丹青社に委託することが決定した。なお、このプレゼンの際に提案された丹青社による原案は、その後、大きく形を変えることになるが、基本的な施設設備の構成は新・人類学博物館に反映されている。

(4) 丹青社との協議

丹青社との実質的な打ち合わせは2010年11月から始まった。第1回の打ち合わせにおいて、業務スケジュールの確認がなされ、竣工と使用開始の時期が確認された。また、ふた夏の「枯らし」期間中は、博物館建設予定地は建築上「ピット」の扱いになっていたため、博物館を設置するための建築確認申請の手続きなどが協議された。建設費用については、上限金額は決められていたが、施設課からの意見として、移転費用や設備面などの必要経費としてある程度見込む必要があるとされたため、内装にかかる費用の設定が検討された。

工期も2012年10月16日から2013年8月31日と決まり、新博物館の開館まで残る時間は2年となっていた。

(5) ユニバーサル・ミュージアム——「全ての人の好奇心のための博物館」

新・人類学博物館のリニューアル計画を進めている最中の2011年3月、美濃加茂市民ミュージアム学芸員の藤村俊氏にお誘いを受け、同館で開催された「ユニバーサル・ミュージアムを掘る」という講演会に参加する機会を得た。講師は吹田市立博物館館長の小山修三氏、そして国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏であった。

広瀬浩二郎氏は歴史学・民俗学を専門と

される研究者で、ご自身が全盲者である。そして、広瀬氏は、視覚障がい者も楽しめる博物館、つまり展示物を触ることのできる博物館としてのユニバーサル・ミュージアムの提唱者でもあった。

広瀬氏の提唱される“ユニバーサル・ミュージアム”とは、ある意味で博物館の“常識”の転換を促すものであり、今後の博物館の一つの方向性を示している。もはや視覚障がい者の博物館利用を制限して良い時代ではない。否、視覚障がい者だけでなく、これまで博物館を利用しにくかった人たちにもきちんと門戸を開くべきである。そして何よりも、視覚障がい者にとって楽しい博物館は、当然、晴眼者にとっても楽しいはずなのである。ここで新・人類学博物館の基本方針はユニバーサル・ミュージアムの方向へと大きく舵を切ることになった。

後日、藤村氏を通じて広瀬氏と連絡をとり、黒沢が民博を訪れて広瀬氏と面会をした。その目的は人類学博物館のリニューアル計画の説明と講演会の依頼であったが、広瀬氏からは、ユニバーサル・ミュージアム化について協力するが、名古屋と大阪では緊密な連携が難しいので名古屋での相談窓口として名古屋ライトハウス名古屋盲人情報文化センター（以下、名古屋ライトハウス）を紹介すること、講演会については7月7日に行うなどが提案された。特に、広瀬氏から、障がい者といっても視覚障がい以外にさまざまであるが、最も博物館利用がしにくい視覚障がい者を当面の対象としてはどうかというアドバイスを受けたのは大きな励ましとなった。

ユニバーサル・ミュージアムという言葉

は日本語に訳しにくい言葉である。だが、基本的な考え方としては、これまで博物館を利用しなかった人たち（あるいは利用できなかった人たち）を含めた「全ての人」を視野に入れた博物館作りということである。また、魅力ある博物館作りという観点からは、博物館というものがもともとは人間のあくなき好奇心に発したものであり、その本当の魅力とは、人々の好奇心を刺激するところにあるとすれば、もう一つのキーワードは必然的に「好奇心」となるであろう。そして、ここに「全ての人に」という言葉と「好奇心」という言葉が結びついた新・人類学博物館のキャッチフレーズができあがった。それが「全ての人々の好奇心のための博物館」である。

その後、学芸員養成課程の講演会として7月7日に「ユニバーサル・ミュージアムの構想」を開催した。この講演会は基本的に学生向けの講演会であったが、当日は博物館関係者を含めて80名を越える人が参加したことは、名古屋およびその近郊でこの問題に関する関心が高いことを実感させるものであった。

ところで、ユニバーサル・ミュージアム化を進めていくなかで感じたことだが、多くの博物館ですでに実施していたり、あるいは考えているであろう視覚障がい者対応は、必ずしもうまくいっていないのではないかと、いうことである。そして、その原因は、まさに博物館が視覚障がい者対応を計画するということの中にあるように思えたのである。それを思い知らされたのは、人類学博物館のユニバーサル・ミュージアム化構想を受けて丹青社が提案した視覚障がい者向けプログラムに対する視覚障がい

者の反応であった。

われわれは、広瀬氏の紹介で名古屋ライトハウスの小川真美子氏とコンタクトをとり、われわれの意図するところを伝えていた。その中で、提案されたプログラムを名古屋ライトハウスの方々に検討していただいたのである。

その結果はどうかといえば、とにかくこのプログラムが全くと言っていいくらい全否定されていたのである。われわれは視覚障がい者向けのプログラムやイベントを実施することで障がい者対応をやっていると思いがちであるが、それは言い換えれば視覚障がい者が博物館を利用できる機会が、そうしたプログラムやイベントに限定されるということである。しかし、視覚障がい者が望むのは、そうした特別な場ではなく、彼ら/彼女らが普通に利用し、普通に楽しめる博物館なのである。結局のところ、博物館で考えるプログラムやイベントとは、晴眼者である学芸員が考えたことであり、当事者である視覚障がい者が望むものと必ずしも一致するわけではない。

その後、名古屋ライトハウスの協力を得て、数回にわたり、資料の触察の実際がどうかを観察させていただいたし（写真1・2）、新しい展示室での触察の仕方について意見をいただいた。そうした意見の反映の一つの成果として、展示室にイスを置くなどの対応を図ったことが挙げられる。われわれの計画では、触察する展示棚の高さを700mmとしていたが、時間のかかる触察の場合、その高さでは長時間触ってられないとの指摘を受けたからである。

(6) 常設展示の構成

新・人類学博物館の建設をすすめるにあ



写真1



写真2

たり、博物館、施設担当、丹青社とで月1回の総合定例会議と博物館・丹青社による不定期の打ち合わせとしての展示分科会がもたれ、問題や課題の相談と工事・作業の進捗状況、スケジュール等の確認が行われた。

新・人類学博物館の基本方針はユニバーサル・ミュージアムの方向で決まったが、これは常設展示のほぼ全てが触れることを意味し、ガラスケースのない展示室を作るということである。実際、常設展示室にはガラスケースは2箇所しかない。それ以外はすべて露出展示となっているが、その展示の方法として考えられたのは、考古資料の土器を棚に配置する、民族誌資料やマリ

ンガー・コレクションの石器は壁面に固定する。平置きしたほうが良いもの(例えば、土器片や装身具類など)は島展示とするなどである。躯体の柱回りにもパプアニューギニアの精霊像などが置かれ、また、シングル・アウトリガー・カヌーや丸木舟などが、それぞれ露出展示されることになった。

そして、もう一つ、常設展示で実現したい構想があった。それは展示替えのし易さ=展示更新性を高めておくことである。その理由は、人類学博物館は大学博物館であり、大学博物館で収集し、展示される資料は全てが学術的な価値付けのされた学術資料であるから、われわれはそれを使って日々研究を進め、その研究成果をいち早く展示に反映させていかなければならないということにある。

しかし、ここで難しかったのは触る展示との兼ね合いである。ガラスケースがなく、全ての資料が露出される展示室では、防犯上・防災上の観点から、ケース内に配置するよりも一層厳重な固定が必要であるとも言える。この相矛盾するようなことを実現するために、その方法について試行錯誤が繰り返された。

博物館としては、壁面展示はメッシュを設置し、そこに資料を固定することと、展示棚の場合にはテグスで固定することであった。だが、壁面のメッシュについては主としてデザイン上のことから資料を固定したパネルを取り付けることになった(写真4)。展示室の壁面には土器展示用の棚板をはめるために一定のピッチでレールがはめ込まれており、このレールにパネルをつけるという方式に変更したのである。

一方、テグスでの固定だが、われわれと

してはテグスを張ったり緩めたりすることが容易になるような仕組みが作れないかと考えていた。博物館関係者であれば誰も経験することだが、テグス掛けにはある種の名人芸的な要素がある。つまり、人によって得手不得手の差が大きく、しかも手間がかかるということは、展示更新性という観点から見たとき大きなデメリットである。そこで、テグスの着脱が容易になるような仕掛けができないかということをも提案したのであるが、結局最後まで良案が出ることはなかった。このように技術上・美観上の理由から展示更新性は大きく後退させざるを得なくなったのである。

しかし、展示更新性を高めることにはこだわった。例えば、展示資料につけるキャプションもアクリルや金属板などではなく、必要な情報を紙に印刷しただけのものにしたし、ユニバーサル化と展示更新性の両方を満たす手段の一つとして、解説をファイルの冊子体で提示することにした(写真3)。これは差し替えを自由にすると同時に、多言語表記を可能にするものとして考えられたのである。オープン時点では日本語・英語の表記の他に、中国語とスペイン語の説明が加えられている。言語の選択は、使用者の多いことを基準としているので、今後、アラビア語・フランス語・ロシア語などを順次追加していくことになる。

さらに、ユニバーサルという観点からは、当然、点字による解説・キャプションも必要になる。点字はその大きさを変更できないため、墨字と同じ文章にするとどうしてもやや大きなスペースが必要になる。そこで通常は墨字の情報を量的に絞って点訳す



写真3



写真4

ることになるが、今回の展示ではそうした操作は一切せず、墨字と点字とで同じ文章を使うことにした。各コーナーには点字の解説が冊子として配置され、各資料にはすべて点字のタグがついてその資料が何であるかわかるようになっている(写真3・4)。

(7) 常設展示以外の諸施設

常設展示以外の施設としては、エントランス、事務室・館長室、展示室内のオープンレファレンスパス(中央廊下)、レファレンス・ルーム、博物館実習室、収蔵庫(前室・一般収蔵庫・特別収蔵庫)、多目的室、多目的トイレ、倉庫などである。博物館教室などは、R棟自体がそもそも教室棟であることから、博物館固有の施設としては当

初から考えていなかった。ここでは収蔵庫とレファレンス・ルームの計画についてだけ述べておく。

収蔵庫は、展示室との境界の壁がガラスになっており、「見せる収蔵庫」となっている。床面積では前室も合わせて 216.7 m² となるが、天井高が最大で 3500 mm、一番低いといころで 2200 mm しかない。これは博物館の直上にフラッテンホールがあるため、博物館の東側に対して西側のほうが 1 m 以上低くなっている。そのために、収蔵庫の西壁では収蔵棚が 3 段しか取れておらず、収蔵量は十分ではない。

収蔵棚の最下段は底板を置かず、その代わりにキャスター付きの簀子を入れて、その上に資料を載せている。これは防災対策や資料の出しやすさということもあるが、もともとは IPM (Integrated Pest Management: 総合的害虫管理) の第一段階として収蔵庫の清掃を容易にすることが目的であった。

レファレンス・ルームは当初、図書室とするつもりで、集密書架を入れる予定であった。しかし、床の耐荷重が集密書架には耐え切れないことがわかり、急遽予定を変更して、壁面の固定式の書架に一般書を中心に配架したレファレンス・ルームとしたのである。

(8) 意見聴取

新・人類学博物館の構想を確定していく段階で、人類学博物館の主だった利用者で見なすことができる本学学生・大学院生、学校の社会科教員、南山学園単位校教員、視覚障がい者を対象として意見聴取の会をおこない、新・人類学博物館に対する要望や意見を述べてもらう機会とした。

この一連の意見聴取の会の記録は人類学博物館紀要第 30 号に掲載されているので、そちらをご参照いただきたい (黒沢・西川 2012)。

(9) 二つの特別展

人類学博物館のリニューアルは、2010 年に本格的にスタートしたが、2013 年のオープンまで、この作業に専念できたわけではなかった。それは 2010 年からの 3 年計画で、明治大学博物館との協定事業が始まっていたからである。特に 2011 年度と 2012 年度には特別展を開催することになっていたため、特別展の準備期間および会期中は、リニューアル計画の方は休止せざるを得ない。その二つの特別展とは、「人類史への挑戦」展と「驚きの博物館コレクション」展である。

① 「明治大学博物館 南山大学人類学博物館合同特別展 人類史への挑戦 南山大学考古・民族コレクション」

2012 年 1 月 20 日から 3 月 20 日まで、明治大学博物館において開催された。協定事業に基づいているとはいえ、実際には明治大学博物館を会場として人類学博物館所蔵資料を公開するという特別展となった。

出品された資料の多くは、東京で初めて展示するもので、2ヶ月の会期中、約 4000 人の来館者を得た。会期中にはギャラリー・トークを行い、また、シンポジウムとして「コレクションの再生——資源化される博物館資料」も開催された。

② 「驚きの博物館コレクション 時を超え、世界を駆ける好奇心」

2013 年 2 月 2 日から 3 月 18 日まで名古屋市博物館で開催された。これも明治大学博物館との協定事業に基づく特別展であっ

たが、名古屋市博物館も加わった合同展として開催されている。その経緯について簡単に触れておきたい。

明治大学博物館と人類学博物館との協定事業では、2011年度に明治大学博物館で特別展を開催したので、2012年度は人類学博物館で開催することになっていた。しかし、人類学博物館がリニューアル準備のために2012年5月をもって閉館しており、また、明治大学博物館が所蔵する重要文化財を人類学博物館では展示することができなかったため、南山での特別展は開催できなかったのである。そこで、名古屋市博物館に対して市博物館での開催はできないかと打診したところ、この依頼を検討していただき、その結果、名古屋市博物館での開催が決定したのである。ただし、市博としても会場貸しはできないので、市博も加わった合同展という形での開催となった。

だが、展示の内容や構成についての協議を始めてみると、さっそく壁に突き当たった。それは、3館を繋ぐ共通項がなかなか見つからないことである。何回かの議論を経て、最終的には博物館にはコレクションがある、という点を強調し、時代も地域も多様な3館の所蔵資料を一同に会したものとす方向性で合意することができた。

この展示で狙ったのは、ヴンダーカンマー的世界観の表現と言おうか、資料の分類とストーリー性を極力排した展示にしたかったのである。そのため、特に民族誌資料の展示コーナーでは“ゴチャ混ぜ”感満載の展示ができあがった。こうした展示手法は、実は新・人類学博物館でも考えていたことなので、そう言う意味でこの機会は良いリハーサルとなった。



写真5 名古屋市博物館でのギャラリートーク

このほか、会期中に講演会2回（大塚初重氏、後藤明氏）、ワークショップ2回（名古屋市博、南山）、ギャラリー・トーク11回（名古屋市博、明治、南山）などの関連事業を行った。会期中の総入館者数は約1万4000人を数えた。

(10) 移転開始

2013年7月30日、いよいよ移転開始の日である。この日としたのは、博物館実習の夏期集中講義の開始日だったからである。これについては説明が必要だろう。

通常、博物館実習は通年科目として、本学の場合、木曜日の2時限目に博物館実習1(永井英治教授担当)、3時限目に実習2(黒沢担当)を開講し、瀬戸キャンパスの学生のために夏期集中講義として実習3(黒沢担当)を開講している。しかし、2013年は博物館の移転とリニューアルの年であり、通常の実習ができないため3クラスをすべて夏期集中として、永井教授が担当している実習1も本年に限って黒沢が担当することにした。博物館実習の一環として移転とリニューアルの作業を行う計画ということである。

作業期間は、博物館実習が3単位なので

	7月							8月							9月							10月																														
	30日	31日	1日	2日	3日	4日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	31日	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	1日	2日	3日
博物館	黒沢	全体統計・学生指導																																																		
	竹尾	考古資料・PNG・今泉																																																		
	西川	タイ山地民・昭和																																																		
	室田	通常業務・後方支援																																																		
	沖田	通常業務・後方支援																																																		
博物館実習1(18名)	資料クリーニング																																																			
博物館実習2(6名)	資料梱包																																																			
博物館実習3(14名)	資料梱包																																																			
黒沢ゼミ3年生(3~4名)	資料クリーニング																																																			
黒沢ゼミ4年生(3~4名)	資料クリーニング																																																			
有志・ボランティア アルバイト	資料クリーニング																																																			
日通(美術品)																																																				
大型資料																																																				
石棺																																																				
業者(事務室・図書室)																																																				
博物館	黒沢	全体統計・学生指導																																																		
	竹尾	収蔵庫																																																		
	西川	展示																																																		
	室田	後方支援																																																		
	沖田	後方支援																																																		
博物館実習1(18名)	移転・展示・収蔵																																																			
博物館実習2(6名)	移転・展示・収蔵																																																			
博物館実習3(14名)	移転・展示・収蔵																																																			
黒沢ゼミ3年生(3~4名)	移転・展示・収蔵																																																			
黒沢ゼミ4年生(3~4名)	移転・展示・収蔵																																																			
有志・ボランティア アルバイト	移転・展示・収蔵																																																			
日通(美術品)																																																				
大型資料																																																				
石棺																																																				
業者(事務室・図書室)																																																				
博物館	黒沢	全体統計・学生指導																																																		
	竹尾	収蔵庫																																																		
	西川	展示																																																		
	室田	後方支援																																																		
	沖田	後方支援																																																		
博物館実習1(18名)	移転・展示・収蔵																																																			
博物館実習2(6名)	移転・展示・収蔵																																																			
博物館実習3(14名)	移転・展示・収蔵																																																			
黒沢ゼミ3年生(3~4名)	移転・展示・収蔵																																																			
黒沢ゼミ4年生(3~4名)	移転・展示・収蔵																																																			
有志・ボランティア アルバイト	移転・展示・収蔵																																																			
日通(美術品)																																																				
大型資料																																																				
石棺																																																				
業者(事務室・図書室)																																																				

図1 移転作業工程表

90 時間行わなければならない。そのため、1 クラスが1 日5 時限（1 時限を2 時間でカウント）で9 日間行うことになる。各クラスの日程と人数は以下のようになった。

博物館実習1 7 月30 日—8 月3 日、
8 月20 日—23 日 18 名

博物館実習2 8 月24 日—9 月4 日
（日曜を除く）8 名受講

博物館実習3 9 月4 日—13 日（日曜
を除く）18 名受講

また、実習の受講生以外に、黒沢の担当するゼミの有志、実習期間外で手伝いに来てくれた学生、社会人ボランティアの方々などが加わり、全期間を通じてほぼ20 名程度の方々へ常時手伝っていただいていた。

移転とリニューアルに向けての作業は次のような手順で行われた（図1）。実習の1 クラスを1 期とすれば、第1 期には展示資料を中心として資料のクリーニングを行った。新築の博物館に搬入するので、カビや害虫を含めた“汚れ”を持ち込みたくなかったことと、触る展示であるために利用者に対して不衛生であってはいけないということから、この期間を通じてクリーニングを行った。中には、G 棟1 階の心理工作室跡地に収蔵されていた今泉コレクションのスリット・ゴングなど、暑さのこもる収蔵庫での作業を行うグループもあり、大変な作業であった。なお、この期間にG 棟博物館入口に展示されていた家形石棺が、清水建設によって移転された。石棺は中央付近で2 分割して運搬をし、R 棟の新・博物館入口で組み立て直しながら設置された（写真6・7）。

第1 期は大学の夏休みをはさんでスケ

ジュールが組み立てていたが、夏休みの間に建築確認検査、消防検査、丹青社社内検査などの検査とクリーニングおよび環境測定が行われた。

第2 期は、一部クリーニングが残ったものの、作業の大部分は移転する資料の梱包に入った。移転資料は、展示資料だけでなく収蔵資料もあるため、その数は概数でほぼ2000 点を超えるものとなった。梱包は、黒沢が梱包方法をレクチャーしたのち、二人一組を基本として進めていった。また、この期間中にシングル・アウトリガー・カヌー、丸木舟、スリット・ゴング、大須二子山古墳出土品（名古屋市文化財）などの一部資料を、日本通運の美術品梱包担当に



写真6 石棺の解体



写真7 石棺の組み立て

梱包・運搬してもらっている。日通には、所定の資料の梱包・運搬終了後も資料の運搬のために車と人員、そして膨大な量の梱包資材を提供していただいた。

第2期中の8月27日に竣工式と建物の引渡しが行われた。丹青社の業務は一応ここまでだが、実際には展示の完成と博物館の開館まで、われわれの作業をサポートしてくれた。また、8月31日と9月1日はイカリ消毒による館内の施設燻蒸が行われた。

第3期は、展示制作である。展示は壁面の展示と島展示およびその下の引き出しの展示に大きく分けられる。壁面の展示については黒沢がレイアウトを作成していたが、黒沢がレイアウトに使用した壁面のサイズが実際には後でやや小さく変更されたことと、ちょうど移転からリニューアル・オープンする時期にかけて二ツ木貝塚の資料を松戸市立博物館へ貸出していたことから部分的な修正が必要であった。ただ、レイアウトを直している時間はなく、修正は現場対応でせざるを得なかった。また、島展示については、レイアウトが未完成だったこともあり、資料をレイアウトしながら固定していく作業となった。

壁面展示、島展示の両方を通じて問題だったのは、資料の固定方法である。先述したように壁面展示では防犯・防災の観点から五徳とテグスでの固定を採用したが、テグスで固定すると資料の移動ができなくなるので、テグスを張るのは土器展示の下から3段目の棚よりも上の棚の資料とし、それよりも下の棚および最下段のテーブルについては五徳およびテグス以外での固定を考えなければならなかった。この事情は

島展示でも同じで、引き出し内の資料の固定をどうするかが課題となった。

ヒントはマリナー資料の固定方法で、ここでは石器の下端をL字形のロットで受けながら、石器自体はゴム(φ1mm)で留めるといったものだった。そこでこれを応用し、土器などの比較的大きい資料にはφ1mmの太めのゴム、石器や土製品などの小型資料にはφ0.5mm～0.3mmの細いゴムを使用した。壁面の触る展示では、ゴムを外しやすくするため、ゴムの一端はクギで固定するが、反対側の端には丸カンをつけ、それをベースのパネルに固定したダルマカンに引っ掛けて固定するようにした。

また、島展示の展示資料の場合、ゴムだけでは弱いので、クギを打ってゴムチューブをはめ、固定できるようにした。これによってゴムが目立たず、見るときの邪魔にならないのは良かったが、ゴム自体が細いため切れやすく、張力が弱いことから十分に固定しきれないなどの欠点もある。

展示には先述したように冊子体の解説をつけたが、マリナー・コレクションと大須二子山古墳の展示コーナーを除いて、基本的にはグラフィックなどの解説パネルは入れなかった。その代わりに民族誌展示のコーナーでは調査時の写真をコラージュするようにした(写真8)。

大変だったのはキャプションである。展示資料が1200点を超えており、しかも墨字のキャプションと点字のタグの両方をつけなければいけない。キャプションは先述のとおり紙ベースであり、Illustratorで作成し、プリンターで出力するという簡易なものであったが、実際にやってみると重複したり、逆に足りなかったりすることが多



写真8 民族誌資料展示と写真

く、かなり混乱してしまった。これは作業を総括するものとして反省しなければならない点であった。

博物館実習による展示作業は9月13日をもって終了した。しかし、作業自体はまだまだ残っており、土・日をはさんで16日以降も作業は続けられた。

(1) 現場見学会の実施

新博物館の工事中および展示作業中に現場見学会を実施した。これは、多くの人にとって、博物館を作っているところを見る機会はほとんどないはずなので、博物館についての理解を深めてもらいたいという意図から実施したものである。

1回目は博物館関係者を対象として、まだ内装工事の途中である5月24日に行ない、空調や照明などについて意見が出ている。

2回目以降は移転し、展示制作の作業をしている期間中に行った。対象を南山学園単位校の教員、博物館関係者、そして大学の教職員として9月11日に実施している。

特に昼休みに行った学内教職員向けの現場見学会は予想をはるかに上回る方々が参加され、博物館に寄せられる期待の大きさを実感することができた。

さいごに——ユニバーサル・ミュージアムの課題

以上のような経過を辿り、2013年10月4日に新・人類学博物館は開館した。オープニングセレモニーとそれに続く内覧会には多くの方がみえ、盛況を博した。しかし、人類学博物館はオープンしたけれども、二つの意味で完成したわけではないと考えている。一つは物理的なことで、実際にこの時点で博物館としては100%の完成したというわけではなかった（今もそうだが）。もう一つは、施設としての博物館はここに出来上がったとしても、博物館の価値を決めていくのはこれからの活動にかかっているということである。

とりわけ、新・人類学博物館をユニバーサル・ミュージアムとした責任は重い。先にも少しふれたが、今日の博物館では常に資料の保存と活用という、相反する課題に同時に取り組まなければならないジレンマを抱えている。この博物館ではかなり極端に資料の活用に舵を切ったが、それが適切な判断だったのかどうかは今でも悩むことである。ほぼ全体を露出展示にしてしまったのだから、やはり考えるべきは防犯・防災対策であろう。このことをおろそかにすることはできない。

突き詰めて言えば、ユニバーサル・ミュージアムの形ということに行き着く。ユニバーサル・ミュージアムに取り組んでこられた方には失礼かもしれないが、これまで

議論されてきた“ユニバーサル・ミュージアム”とはあくまでも理念型であり、それを具体化するときにはどのような姿を思い描けばいいのか。この博物館で実現しようと思ったとき、拠って立つものがないことに気がついたのである。そう言う意味で、新・人類学博物館はユニバーサル・ミュージアムである、と言えるのではなく、それを目指す博物館である。そして、これからのユニバーサル・ミュージアムをめぐる今後の議論はここから始まる。

最後に人類学博物館のリニューアルにあたって、担当した人、協力してくれた人たちの名前を列挙して感謝の意を表したい。

南山大学 ミカエル・カルマノ（学長）、野呂昌満（副学長）、青木清（副学長）、沢口定雄（大学事務長）、三谷靖司（教育・研究事務部長 当時）、奥村良和（施設課長）、伊藤真司（施設課）、東誠（教育・研究事務室長故人）、大川隆（教育・研究事務室長）、山田真紀（教育・研究事務室）、児玉和典（学長室長）、濱島真由（学長室）、南宏幸（学長室）

南山学園 波田一夫（法人事務局施設事務室長）

（役職は全て当時）

人類学博物館 青木清（館長）竹尾美里、西川由佳里、室田美香、沖田朋絵

人類学博物館運営委員会 大塚達朗、加藤隆浩、濱田琢司、大川隆

人類学博物館のリニューアルに関する作業部会 大塚達朗、後藤明、永井英治、近藤幸文

プロポーザル委員 荒井信貴（岡崎市美術博物館）、井口智子（名古屋ポストン美術館）、可児光生（美濃加茂市民ミュージアム）、高橋洋子（情報理工学部）

丹青社 青田嘉光（代表取締役社長）、斎藤克己、三澤彰生（名古屋支店）、鶴岡誠（名古屋支店）、鶴留武彦（名古屋支店）、田中啓史（名古屋支店）、岡本靖生、安斎聡子、倉本大樹

丹青研究所 里見親幸（代表取締役社長 プロポーザル当時）、森俊憲（代表取締役社長）、小林宣史（取締役）、一ノ瀬裕行

名古屋ライトハウス 小川真美子、藤下直美、森幸久、岩間康治、寺西善彦
イカリ消毒 角谷純一、岡井俊和

日本通運 根木宏政、宍戸亮介

博物館実習 如法寺慶大、市川莉子、河村廣成、奥村茉由、中林那由多、渡邊綾美（TA）

第1期 中嶋結希、藤田舞香、鈴木智子、王子華、月城沙耶、安場摩利耶、木村麻里、新田楓子、福岡詩織、小林希衣、竹内翼、馬場麻理子、古村奈実、松井美奈枝、鈴木七実、荒木志乃、浅田佳奈、梅村尚加

第2期 奥田亜華音、水野彩香、秋山貴恵、深谷典子、金山智夏、三輪侑未、長崎剛大、中根綾香

第3期 寺尾望、平井たから、野田伸太郎、大原萌子、榊原千明、瀧はる香、渡邊峻、加藤里奈、林万里、平林美紀、達原佳奈、松本由梨、西川聡多、丹羽麻美、太田はるか、上

小路咲生、横地葵、近藤智子
南山大学学生 新井優、平井亮、平松知実、
伊藤香織、亀山沙希、金山智夏、
森田千絵、長崎剛大、長葭淳央、
中根綾香、西川聡多、西尾真琴、
丹羽麻美、丹下栞、遠田憲佑、八
木萌子（3年生）、青山香澄、市川
莉子、片山綾、坂下凌哉、鈴木智
子、瀧はる香、安場摩利耶、渡邊
峻（4年生）
ボランティア 加藤新一郎、山崎達夫、長
谷川清貴、小野初、飯野文子、水
口裕、渥美淑子

（敬称略）

引用文献

黒沢浩 2007「人類学博物館の資料収集」

『HOMINIS DIGNITAI 1932-2007 南山学
園創立 75 周年記念誌』南山学園創立 75 周
年記念誌編纂委員会、136-139 p. p
黒沢浩・西川由佳里 2012「新しい人類学博物
館への提言」『人類学博物館紀要』第 30 号、
南山大学人類学博物館、51-70 p. p
南山大学史料室 2011『南山学園史料集 6 南
山大学の人類学』南山学園
大橋昭夫 2005「現代文明への警鐘——鶴ヶ島
市「オセアニア・コレクション」の意義」
『埼玉県鶴ヶ島市教育委員会編『オセアニア
美術にみる「知流」を超えるもの』、163-210
p. p
重松和男 2004「上智大学からの移管の経緯と
資料内容」『人類学博物館紀要』第 22 号、南
山大学人類学博物館、14-15 p. p

Renovation of Nanzan University Museum of Anthropology

KUROSAWA Hiroshi

This paper reports the process of renovation of Nanzan University Museum of Anthropology, which re-opened on 4 October, 2013.

The museum first started with the research and collection of materials (the consequences of research) by the anthropology/archaeology staffs of the university. The museum has also offered practical training to students: one of the important roles of university museum. It is clear that our museum is now required to contribute to general people as well.

The reform of the Museum of Anthropology started in 2004, with the enforcement of regulations of the museum, and established the new organization. The project of relocation of the museum to the basement of the newly built Building R started in 2009. At this point, we decided to make a new museum with a new concept. The new museum adopted universal design in order that even people with impaired vision can touch and feel those items displayed in the museum.

Even so, there would be any problems occurring due to such universalization, and the real merit of our museum should be proved by solving such problems.

アウフェンアンガー師のセピック河流域調査と 人類学博物館所蔵資料について

竹尾 美里

はじめに

現在南山大学人類学博物館に収蔵・展示されているパプアニューギニアの資料は、主に1964年に派遣された南山大学東ニューギニア学術調査団によって収集された資料群である。高山地帯とセピック河流域の部族から集められた膨大な量の資料は、考古学班、民族学班、言語学班それぞれのメンバーが入手したもので構成されている。さらに調査団の帰国後に再度高山地帯に渡航した沼澤神父の収集品も含まれる。

2013年10月にリニューアルオープンした人類学博物館の常設展示室には、考古/民族/生活資料がコレクション単位で展示されており、ニューギニアの資料のうち高山地帯のものは「南山大学の考古・民族学研究」のカテゴリーに、アウフェンアンガー師がセピック河流域で収集したものは、神言会神父らによる調査の過程で収集された資料を示す「信仰と研究」のカテゴリーに組み込まれている。つまり、同じニューギニアの資料であっても、人類学博物館の通称「今泉コレクション」（2009年鶴ヶ島市より寄贈）に含まれているニューギニアの資料と、学術調査団およびアウフェンアンガー師の収集資料とでは、それぞれその収集目的やコレクションとしての性格は大きく異なったものとして位置づけられてい

る。

とはいえ、現段階で調査目的やその成果と、実際の収集品とのつながりを見学者に十分伝えるまでに至っているのかというと、まだ課題が残っているように感じられる。例えば、発掘して収集された考古資料の場合は、展示解説に加え発掘報告書と照らし合わせることによって、遺跡と資料との関係、また場合によっては発掘者と調査との関わり方などを見学者は知ることができる。ところが、ニューギニア資料の場合は、基本的な情報量の少なさと、資料の一種独特な形状からか、見学者はある種の唐突感をもってこれらの資料に対峙しているように筆者には感じられた。展示解説として「そのモノが何であるのか」「何に使うものなのか」という基本情報を提供することはいうまでもないが、大学博物館が収集している資料である以上、これらの資料は学術資料であり研究者たちが、どこで、なぜ、どのようにして集めたのかという情報を提供することが、見学者に与えられる民族誌資料展示の醍醐味（同時に難しさでもあるのだが）ではないだろうか。

本稿では、収集資料の背景を探るべく、アウフェンアンガー師が収集に携わったセピック河流域の資料の一部について、1972年に出版された同師の著書 *The Passing Scene in New-Guinea* の記述を検証するこ

とで所蔵資料との同定作業を試みたものである。

アウフェンアンガー師の調査について

Henry Aufenanger, *The Passing Scene in New-Guinea* (1972) は、序文で明らかにされているように、1963年から1964年にかけてアウフェンアンガー師がおこなったニューギニア島北東部でのフィールドワークの成果をまとめたものである¹⁾。アウフェンアンガー師は神言修道会 (Society of the Divine Word) の宣教師として1934年にニューギニアの高山地帯のミッションを皮切りに、20年近くニューギニアに滞在していた。1955年にウィーン大学で博士号 (人類学) を取得するまでの間に、高山地帯に関する著作を数多く発表しており、各地の習慣や伝承についての記録に加え、言語に関する著作もいくつか残している²⁾。

1960年代に入りニューギニアは学術的な対象としても注目を集めるようになる。南山大学で教鞭をとるようになったアウフェンアンガー師が、1964年の南山大学の調査に参加することになったのも、このような背景があったからである。当時の文部省の科学研究費と地元企業の支援により実現されたこの調査において、アウフェンアンガー師は以下二点を調査の目的としていた。一つは、後の人類学博物館となる陳列室への陳列目的で現地資料を入手することとであり、そしてもう一つは太陽信仰 (Sun Cult) に関する情報を収集することであった³⁾。30年代から50年代までの時期を宣教師として滞在してきた彼自身の経験から、西洋文明と触れることで急速に変化していくニューギニアの伝統的な社会につい

て書き残さねばならないという必要性も感じたのだと思われる。

調査のおこなわれた地域の景観を特徴づけているのが、セピック河とその周辺の山岳地帯である。セピック河は、ニューギニア島の中央を背骨のように東西に走る山脈から北東部の湿地帯を通過し、島の北部に位置するビスマルク海へ流れ出る、オセアニア地域で随一の大河で知られている。さらにセピック河の北岸と海岸線との間には、高山地帯程ではないが、二つの1000m級の山々が連なっている。一つはウェワク Wewak の町の西側に位置し、海岸線に沿うように横たわるプリンス・アレクサンダー山脈である。そしてもう一つが、プリンス・アレクサンダー山脈の西隣のやや内陸側を走るトリッチェリ山脈である (第1図参照)。調査地域は沿岸部を含め、この二つの山脈周辺を中心におこなわれた。1972年の著書では18のエリア別で章が構成され、さらに小さな村単位に分かれているが、その村々の位置については詳細は不明である⁴⁾。

各地でおこなわれた聞き取り内容は、創世神話などその村に伝わる神話や伝承、成人儀礼、精霊、冠婚葬祭、呪術などが中心となっており、そうした記述の中に現地で見聞きした物質文化に関する情報が含まれている。人類学博物館が所蔵する資料に関する記述として想定されるものは、I was able to acquire~, I got~または I buy~と言及されている箇所であり、その中で同定が可能であったものについて以下で報告する。

同定資料について

1. ツルブ地区 (Turubu) の実用石斧

(資料番号 11-423、写真 1・2、第 2 図)

全長 (柄) : 6470 mm

最大幅 (装着部) : 250 mm

全長 (石斧) : 130 mm

長さ (刀部) : 550 mm

ツルブはビスマルク海沿岸に位置する地区で、石斧の生産地として有名であり各村々で石斧を製作していた。現在 (2014 年 2 月) 収蔵庫に納められている柄付き石斧は、ビスマルク海沿岸のツルブ村から徒歩で 20 分程のところの位置するサナンベライ Sanambelai という村で作られたものだという。ここで、アウフェンアンガー師はダリナ Darina という名の男から、彼の父親が石斧を製作していたことや、石斧を買い求めに遠方の人々がやってきて、貝貨と交換していたこと、またその製作方法について聞いたようである⁹⁾。そしてこの時、男からもらった石斧が当該の資料と思われる (写真 1・2、第 2 図)。石斧の柄の部分に収集時の情報が手書きで書き込まれている。

2. ツルブ地区の土器製作用木製コテ

(資料番号 11-108、写真 7)

全長 : 3450 mm、最大幅 : 80 mm

ツルブ地区のケプ (Kep) 村で収集された木製のコテである。この地区での土器製作では整形時にこの種のコテでたたいて仕上げをしたと思われる⁹⁾。土器作りの様子を撮影した写真も掲載されている⁷⁾。

3. ネグリ地区 (Negri) の婚資用木製鳥付き籐製品

(資料番号 11-65、写真 5)

全長 : 420 mm、最大幅 : 160 mm

(資料番号 11-66、写真 6)

全長 : 420 mm、最大幅 : 130 mm

現在常設展示されている (資料番号 11-65) は著書の中で数少ないスケッチの挿絵がある資料の一つである。また、同種の資料 (資料番号 11-66) も収蔵されており、いずれも手書きの書き込みラベルが貼りつけてある。そこに「Negri」の文字が読み取れることから⁹⁾、これら二つの資料はこの地区で収集されたものと断定できる⁹⁾。英訳では Plaited Hornbill totembird with wooden head とされているように、ヒクイドリを模した木製の頭部が、植物繊維で編み上げられた筒状の胴体部に取り付けられたもので、その胴部には顔のような装飾が施されている。現在収蔵されている資料の状態では外れてしまっているが、挿絵と本文からわかるように、この筒状の胴体部の下にシロチョウ貝製の貝貨をぶら下げて使用する。結納品として花婿側から花嫁側の家に送られるこの地方独特のものである¹⁰⁾。

4. サソヤ地区 (Sassoya) の成人儀礼用大皿 (資料番号 11-98、写真 3・4)

最大径 : 890 mm、高さ : 128 mm

ウェワクから南西約 20 km、プリンス・アレクサンダー山脈の麓に位置するサソヤ地区のハンドラドグム村 (Handradogum) で収集した木製の大皿である。村の男児が参加する成人儀礼用の食事をのせる皿として使用されるもので、外側の底部にはアウ

フェンアンガー師曰く「symbol of the sun」が掘られている¹¹⁾。

今後の課題

収集地域のデータが不足している点に加え、アウフェンアンガー師の言及もそれほど多くないことから、ニューギニア資料の同定は非常に困難であることは明らかである。また、この1972年の著作は、非常に多くの地域の、おそらく今ではもう忘れ去られてしまっているような儀礼や伝統、伝説について記述しているという点においては評価されるべきものであるが、その反面、Roger Toner (1974) が書評で指摘しているように、首尾一貫していない構成や、物質文化に対する情報不足、文化や地理区分に関する考察が抜け落ちており、読者にとってはなかなか読みにくい内容であることは否めない。

とはいえ、資料カードや台帳などの記述から「セツピク河流域」より細かな地域が判別している資料に関しては、他の博物館が所蔵しているコレクションや美術マーケットに出回っている資料との比較を通じて、資料と特定の地域や部族とを結びつける手掛りを得ることは十分可能であろう。そうした一連の作業を踏まえて、今一度アウフェンアンガー師の調査報告にフィードバックすることができるのであれば、より深い資料収集の背景を探ることが可能になるかもしれない。

(前人類学博物館学芸員)

注

1) 調査期間の後半が学術調査団の調査と重なっていたのか。

2) 1933年にSVDのミッション施設が高山地帯のBundiに建てられ、翌年にアウフェンアンガーも宣教師として着任する。その後1948年にNonduglのミッションへ移ったようである。cf. Terence E. Hays (1992) *Ethnographic Presents: Pioneering Anthropologists in the Papua New Guinea*, University of California Press, p. 23.

1960年代以前に出版された書籍については以下のものが挙げられる。Aufenanger, H. & Höltker, G. (1940) *Die Gende in Zentralneuguinea. Vom Leben und Denken eines Papua-Stammes im Bismarckgebirge*, Missionsdruckerei St. Gabriel, Wien-Mödling. Aufenanger, H. (1953) *Vokabular und Grammatik der Gende-Sprache in Zentral-Neuguinea* (Micro-Bibliotheca Anthropos Vol. 1) / von Arnold Burgmann.

3) Aufenanger (1972) 1.

4) このエリア別の章立てが文化的なつながりを考慮しているのか疑問視する指摘もみられる。Roger Toner, M. (1974) Reviews, *The journal of the Polynesian society*, 83-3, pp. 372-5.

5) Aufenanger (1972) 47-8.

6) Aufenanger (1972) Pl. III

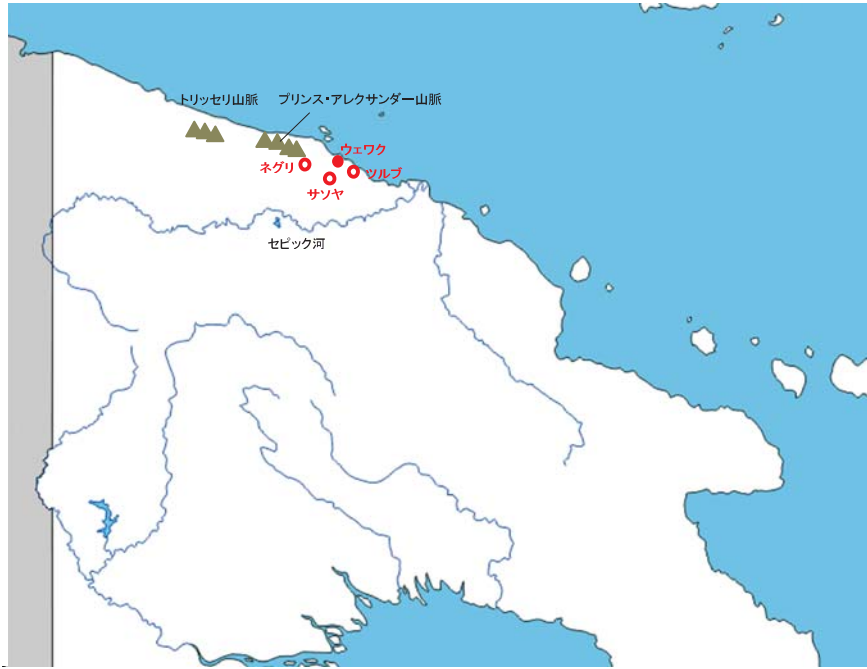
7) Aufenanger (1972) 42. この他にこの地区で、木製の槍、木製の椀、土器、石斧を入手していることが記されているが、情報が不足しているため確実に同定することはできなかった。

8) 手書きラベルには「Rev Br. Gonzaga Wewak From H Aufenanger Negri」と

ある。

- 9) Aufenanger (1972) 186.
- 10) Aufenanger (1972) 205-6.
- 11) Aufenanger (1972) 147, 149. この地域

の大皿に関するカタログがPDFの形で近年刊行されている。Hamson, M. (2011) *Art of the Boiken*. (<http://www.michaelhamson.com> 内)



第1図 セピック河流域



写真1 資料番号 11-423



写真2 拡大写真



写真3 資料番号 11-98 (上部)



写真4 資料番号 11-98 (底部外側)



写真5 資料番号 11-65



写真6 資料番号 11-66



写真7 資料番号 11-108



第2図 石斧 (資料番号 11-423)

Collection of Rev. Henry Aufenanger from the Sepik valley

TAKEO Misato

The Passing Scene in New-Guinea (1972) by Rev. Henry Aufenanger is the work reporting his fieldwork in the north-east area of New Guinea (1963–64). Items from this area are now collected in Nanzan University Museum of Anthropology, but the details of them are mostly uncertain. This paper tries to identify the collection items in the museum with those referred to by Rev. Aufenanger in his writing.

南山大学人類学博物館所蔵の陶俑

西川由佳里

はじめに

南山大学人類学博物館の所蔵資料の収集経路は、三つに大別できる。まず一つ目は、神言修道会の神父や南山大学の教職員、学生らの調査・研究によって形成された資料群である。マリンガー神父によって収集されたヨーロッパの旧石器資料（通称マリンガーコレクション）や、グロート神父によって収集された縄文時代の資料がこれにあたる。二つ目は、他団体や個人からの寄贈によって形成された資料群である。埼玉県鶴ヶ島市より寄贈されたオセアニアの美術資料（通称今泉コレクション¹⁾）や、上智大学より寄贈された北部タイ山地民の民族誌資料²⁾、また個人から寄贈された、昭和時代の電化製品等の現代生活史資料などがこれに該当する。そして三つ目が、博物館予算からの支出によって集められた資料群である。日本や中国の鏡、そして本稿で取り上げる中国出土の陶俑などがこのカテゴリーに含まれる。

調査・研究によって、また寄贈によって形成された収集群と異なり、購入によって形成された資料群は、資料そのもののバックデータはもとより入手経路についても不明なものが多い。本稿は、購入により当館に所蔵されることになった資料の一つである陶俑について調査をし、その結果明らかとなった事実について報告するものである。

1. 俑の位置づけ

俑とは、死者とともに墓に納められた人や鳥獣を象った人形を指す³⁾。材質としては、木、石、銅、玉などがあるが、最も多く用いられたのが土であり、その結果陶製の俑（陶俑）が数多く製作された。

俑は、戦国時代以降に流行し、秦・漢代に発展を遂げたとされる。そして、絢爛たる唐文化の下、目にも艶やかな唐三彩の俑が作られた後に、宋・遼・金・元・明と衰退期を迎えることとなった。

俑には、二〇世紀半ばまではほとんど着目されず、熱心な収集・研究がされてこなかったという一面があった。しかし今日では、中国の塑像芸術の技を知るうえでも、また各時代の習俗や制度を知るうえでも、俑の学術的価値は重要なものであるとみなされている。それは、出土数が少なく、衰退期とされる宋代以降であっても、また同様である。

2. 古代中国の葬送と俑

戦国時代以降に訪れた俑の隆盛には、古代中国の葬送儀礼が深く関係しているとされている。

古代中国では、肉体という容器の中に「魂」が入り、人が形成されていると考えられていた。「魂」という文字は、「云（＝ふわふわと浮かぶ雲）」と、「鬼（＝死者の靈魂を表す）⁴⁾」に分解することができる⁵⁾。

また、「魂」に対して「魄」という存在もあった。「魂」がこころ《人格性を司り、生命力の源泉》とするならば、「魄」はからだ《身体生命の統御》とされた。そして、「魄」は死後も滞留するとされた⁶⁾。古代中国の人々にとって死とは、肉体（容器）から魂が抜け出て、再び肉体に戻れなくなってしまった状態であると認識されていた。靈魂の存在は埋葬の習慣を生み出し、儒教においては、抜け出た魂が再び肉体へ舞い戻る可能性があるため、遺骸は適切に管理しなければならないと説かれた。このような靈魂観が葬送儀礼に反映され、とりわけ埋葬者が権力者であった場合は厚葬という形で顕在化した⁷⁾。権力者の墓には、居室のような空間が土中に構築され、数多くの副葬品が納められた。そして、死者の従者とするために、墓には人、馬、犬、鶏などが生き埋めにされた。ところが春秋戦国時代に入ると、封建社会の成立によって、これまで「礼」とされていた殉死は「非礼」と批判されることとなった。そして殉死者の代替品としてさかんに製作されるようになったのが、俑であるとされている。

3. 南山大学人類学博物館の陶俑

南山大学人類学博物館の陶俑は、前述の通り、時代や出土地などの記録は残されておらず、また、入手経路についても不明である。

① 10-602 [高さ：16.5 cm 幅 4.0 cm、写真・図 1]

両手を膝の上に揃え座る侍者の灰陶加彩俑である。自立するが、足の表現は簡略化されている。頭部と袖が厚く立体的なのに対し、胴体は薄い。顔には目、鼻、口の表

現がみられ、額で髪を左右に分け結っている。手指はないが、左右の袖口に内側に向かって一つずつ穿孔されており、器物を捧げ持っていた可能性がある。顔、襟、袖口は白に、髪は黒に、後頭部は赤に着色されている。大きめの頭部に対し扁平な胴体、また量感のある袖口の表現から、前漢時代に作製されたと推測される。

② 10-600 [高さ：17.0 cm 幅 4.5 cm、写真・図 2]

両手を膝上に揃え、袖口を合わせて座る侍者の灰陶加彩俑である。やや前傾気味に自立する。頭部と袖が厚く立体的である。顔には目、鼻、口の表現がみられ、額で髪を左右に分け結っている。底部は平らで、中央に穴が開けられている。量感ある袖口の表現や、袖を合わせ坐する姿から前漢時代に作製されたと推測される。全体的に白色での着色が認められ、これは下塗り（白化粧）の色とみられる。彩色の前に全体あるいは部分的に、白色の泥漿しろうを施し彩色の効果を高める手法は、漢代の俑に見受けられる特徴の一つである。

③ 10-593 [高さ：20.8 cm 幅 5.5 cm、写真・図 3]

直立の姿勢をとる男性の灰陶加彩俑である。襟が丸く裾が朝顔の花のように広がっている長袍を身に纏い、腰には帯と装飾品が認められる。顔には目、鼻、口、髭の表現がみられ、額で髪を左右に分け後頭部で結っている。細く胴長な体軀をしており、自立する。身は、別々に作られた前半分と後ろを接合したもののようである。全体的に白色で着色されており、これも10-600同様、彩色のための下塗りともみられる。焼成温度は比較的高かったとみられ、敲くと

高い音がする。大きめの頭部に対し扁平な胴体という身体表現から、前漢時代に作製されたと推測される。

④ 10-605 [高さ：20.3 cm 幅 6.0 cm、
写真・図 4]

直立の姿勢をとる兵士の灰陶加彩俑である。右手は握り締めて胸部に掲げ、左手は腹部に掲げる。自立し、中空である。盔(かぶと)をかぶり、首の詰まった上衣に帯を締め、褲(ズボン)を身に纏っている。顔は前方を見据えるようにやや上を向く。眉、目、鼻、口の表現がみられ、表情は①～③に比べ闊達である。身は、別々に作られた前半分と後ろを接合したもののようである。全体的に着色がされていたようであるが、剥落が激しく色の判別はできない。下半身が太く、臀部から足首までが一体化したような身体表現や、線の凹凸を用いた造形方法からは、北魏時代の俑⁸⁾との類似点が窺える。

⑤ 10-610 [高さ：20.25 cm 幅 6.2 cm、
写真・図 5]

直立の姿勢をとる兵士の俑である。右手と左手は握り締められ、それぞれを腹部と腰部に掲げる。足の裏は平らで中央が穿孔され自立し、中空である。盔(かぶと)をかぶり、甲を身に付けている。衣装の襷や胸甲の装飾といった細部が、凹凸により精緻に作りこまれている。着用している褲は膝下で窄まっているようにも見え、動きやすいように褲の膝下部分を絹の帯で結んだ、魏晋南北朝時代の特徴的な服装の一つである、縛褲(はくこ)に似ている。顔は前方を見据えるようにやや上を向き、眉、目、鼻、口、髭の表現がみられる。胴体と脚部がほぼ同じ太さをしており、足の下には丸い台座が

確認できる。白い下地の上に、緑釉が全体的にかけられている。釉薬が施されていることからして、前漢末期以降の作であると推測される。

(南山大学人類学博物館特別嘱託職員)

註

- 1) 当該資料群については、後藤明・中尾世治・如法寺慶大・長谷川真美 2011「鶴ヶ島市寄贈・今泉ニューギニア美術コレクションについて」『南山大学人類学博物館紀要 第29号』南山大学人類学博物館 に詳しい。
- 2) 当該資料群については、重松和男 2004「上智大学からの移管の経緯と資料説明」『南山大学人類学博物館紀要 第22号』南山大学人類学博物館 に詳しい。
- 3) 同じく副葬品として、明器がある。明器とは「神明の器」を意味し、墓に副葬されるためのみに作られた、実物に形は似ているが実物の機能を有していないもののことを指す。
- 4) 鬼と言うと、日本語の感覚では民話や伝承に登場する怪物を想起するが、中国では靈魂を示す。寺院で保管される過去帳のことを「点鬼簿」と呼んだり、また人が死亡することを「鬼籍に入る」などと言ったりするが、ここで使われている「鬼」はまさにその意味である。
- 5) 大形徹 2000『魂のありか—中国古代の靈魂観』角川書店
- 6) 上村徹 2009「古代中国の靈魂観—ニューギニア研究者の視点から」アジア遊学 128『古代世界の靈魂観』勉誠

出版

- 7) 富田哲雄・長谷部楽爾監修 1998『陶俑 (中国の陶磁)』平凡社
- 8) 1953年に発掘された、陝西省西安草廠坡北魏墓出土の騎兵俑(陝西省博物館蔵)と顔や脚の造形、衣服の形に類似点がみられる。華梅 2003『中国服装史—五千年の歴史を検証する—』白帝社によると、小さな袖の短い上衣に長いズボンという組み合わせは、中原の人々の服装ではなく北方の少数民族の服(胡服)であるという。『史記・趙世家』には戦国時代に趙の武靈王が従来 の長袍に代わるものとして、動きやすい胡服を軍服として採用したことが記されている。胡服の形や着用方法は、

後に漢民族の軍服にも取り入れられていくことになったといわれている。

参考文献

- 朝日新聞社 1984「中国の陶俑と陶磁史」『「中国陶俑の美」展図録』朝日新聞社大形徹
2000『魂のありか—中国古代の靈魂観』角川書店
華梅 2003『中国服装史—五千年の歴史を検証する—』白帝社
上村徹 2009「古代中国の靈魂観—ニューギニア研究者の視点から」アジア遊学 128『古代世界の靈魂観』勉誠出版
富田哲雄・長谷部楽爾監修 1998『陶俑 (中国の陶磁)』、平凡社
富田哲雄 1998『陶俑 (中国の陶磁)』平凡社



写真1



写真2



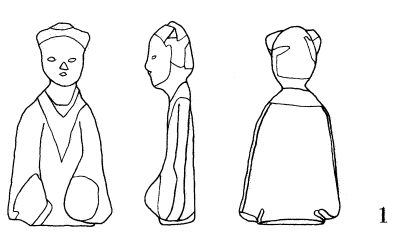
写真3



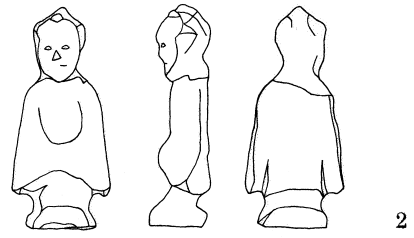
写真4



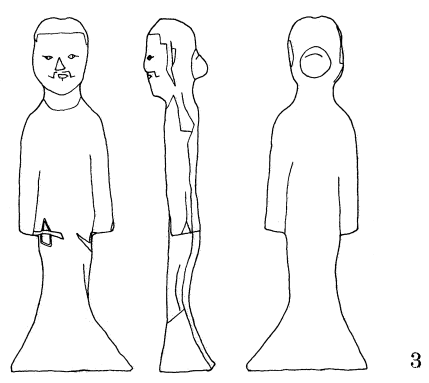
写真5



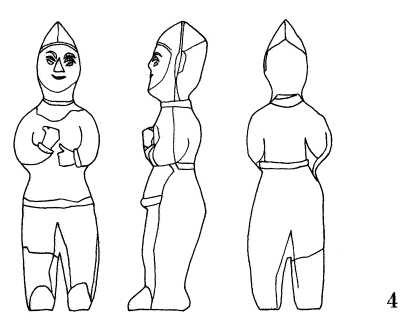
1



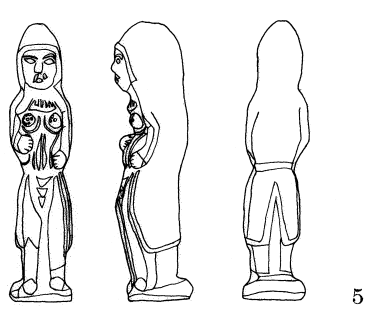
2



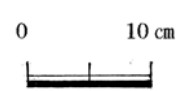
3



4



5



人類学博物館所蔵陶俑実測図

Pottery figures at Nanzan University Museum of Anthropology

NISHIKAWA Yukari

This paper reports five Chinese pottery figures collected in Nanzan University Museum of Anthropology. We have no details about those human figures except for the fact that they were purchased at some point. Three out of five items are supposed to have been made during Western Han Dynasty. It is required to continue further research on them.

新たに寄贈されたバンチェン土器

——山口由子氏コレクション——

西江 清高・黒沢 浩

1 はじめに

バンチェン遺跡は、タイ東北部コラート高原のウドンタニ県ノンハン郡バンチェン村で発見された先史時代の遺跡で、1340 × 500 m、比高差 2 m ほどの微高地上に所在する。1960年にタイ芸術局が発見し、1966年にアメリカ人のヤングがそれを再発見した。1967年にはタイ芸術局によって第1次調査がおこなわれた。大量の青銅器と美しい彩文土器が出土し、出土した土器片の熱ルミネッセンス法による3つの年代が前5千年紀あるいは前4千年紀に溯る世界最古を示すものとして反響を呼んだ。

1974～75年にはタイ芸術局のピシットとペンシルバニア大学のゴーマンを中心としたタイ・米国合同による第2次の調査が実施され、公表された14点の¹⁴C年代のうちの最古のものは3600 B.C.とされた。実は当時、バンチェン遺跡に先行して1965年～68年、2次にわたって調査された同じタイ東北部コンケン県のノンノクタ遺跡の調査結果からも、前3千年紀中頃には青銅器が出現していたとする見解が出されていた。

これらの結果にもとづいて、ハワイ大学のソールハイムらを中心とする研究者は東南アジア先史時代を再構成するモデルを提唱したのであった。従来、東南アジアの歴史は中国文明とインド文明の影響を背景として説明されるのが常であったが、そこに

東南アジア先史文化の先進性と独自性を主張する新たな歴史観が提唱されたのである。しかしこの先史時代観の根拠となったバンチェン、ノンノクタ両遺跡の編年的枠組みは、その後の慎重な研究の積みかさねの上にやがてくずれさることとなった。現在ではタイ、ベトナムをはじめとする東南アジア大陸部および中国大陸の先史諸文化の関係性を調和的に説明する枠組みが支持されるようになっている。

年代観は大きく変更されたが、東南アジア大陸部を代表する先史時代遺跡としてのバンチェン遺跡の学術的重要性は変わるところがない。1992年、同遺跡は「特定文化の存在を示す稀少性」によって、世界文化遺産に登録された（坂井 2007）。（西江）

2 南山大学人類学博物館に寄贈されたバンチェン文化の土器資料

2013年より正式に南山大学人類学博物館の収蔵資料となったバンチェン文化の土器15点は、東京都港区在住の山口由子氏（東洋史学者であった故山口修氏夫人）より寄贈されたものである。2011年3月に山口由子氏から筆者（西江）に連絡があり、所有されるバンチェン土器をお譲りしたいというお話しであった。そこで筆者は、その土器を南山大学人類学博物館にご寄贈いただけないかと提案申し上げたところ、ご快諾いただいたしだいである。

この15点の土器は、じつはもともとは山口由子氏のご実妹である鷺崎知子氏が所有されていたものであった。1970年代のはじめ頃、バンコクに駐在されていた鷺崎氏ご夫妻が、当時話題となっていたバンチェン遺跡に興味をもたれ、1973年4月に現地バンチェン遺跡に旅行されたのだという。土器はすべてそのときに現地で購入されたということである。したがってこれら15点の土器は、入手の日付のついた、そしておそらくはバンチェン遺跡の出土品であることが確実な、学術的に貴重な資料なのである。

今回の15点の土器が入手された1973年前後のことをすこしふり返っておきたい。1977年に自身のバンチェン土器コレクションを紹介した『バンチェン陶大観』を出版された太田豊人氏によれば、同氏が最初にバンチェン土器を見て感銘をうけ、土器を購入されたのは1969年頃の香港の骨董店であったという。太田氏はその後もしばしば香港やシンガポールに出かけては、バンチェン土器の蒐集につとめたという。「その頃からこの土器は世界的に注目されるようになり、世界各地の愛好家や博物館がこの土器の入手に熱心となっていったようである。それにつれて贋物も出まわるようになったようである」と、蒐集当時のことを回顧されている(太田1977)。

同書に「バンチェン文化」と題する解説論文を寄稿した量博満氏によれば、同氏が1970年と71年にタイを訪れた際にはバンチェン文化に関する話題はまだ耳にしなかったという。日本では1972年9月に、タイで最古の青銅器文明が発見されたとの新聞報道がなされて大きな話題となり、

1972年から1974年頃には当時の『朝日アジアレビュー』誌などで相ついで特集が組まれたり、初期の調査報告が学会誌で翻訳紹介されたりしたのであった¹⁾。

こうしたことが一つの動機となって、1977年5月には日本において東南アジア考古学会が設立され、その第1回総会では早速「バンチェン文化に関する諸問題」と題するシンポジウムがおこなわれた。当時学部の学生であった筆者(西江)もこの会議への出席を許され、「バンチェン問題」が東南アジア先史考古学のあらたな時代への扉となっていることを印象づけられた(量1977・東南アジア考古学会1981)。

先述したように南山大学人類学博物館に寄贈されたバンチェン土器は、1973年4月にバンチェン村で購入されたものである。この日付は、日本で最初の新聞報道があったときからわずかに半年後のことである。南山大学人類学博物館収蔵のバンチェン土器が、バンチェン文化が世界的な話題となった当時の、それもかなり早い時期に入手されたものであることが知られよう。バンチェン物と称される土器は、その頃から多く世界に出まわっているが、タイ東北部の別の地点の出土品である可能性も否定できず、人類学博物館収蔵品のようにバンチェン出土品であることが確かなケースは稀であろう。(西江)

3 バンチェン遺跡の編年と土器・金属器

1974～75年のタイ・米国合同調査の結果は、今日にいたるまでバンチェン遺跡に関する基本的情報を提供する唯一のものとなっている。これについて日本では、1977年の量博満氏による紹介と問題提起(量

1977)、1982年の今村啓爾氏による年代問題に関するレビュー論文(今村1982)、そして後に1998年と2001年に新田栄治氏が概説書のなかで総括した研究(坂井・西村・新田1998・新田2001)があり、ここではそれら先人のまとめにしたがって、バンチェン遺跡の土器・金属器の内容についてごく簡単に紹介しておこう。

発掘されたのはおもに微高地にある集落址周辺部の墓域であり、出土品は基本的に副葬品であったと考えられる。発掘担当者らは遺跡における先史時代文化(バンチェン文化)を6期(墓葬期Phase)に編年している。最下層のⅠ・Ⅱ期では、縄目土器と刻文のある黒色磨研土器(黒色刻文土器)が見られる。黒色土器には混和材として稲の籾殻を使用したものが多く、稲作の存在が示唆されている。すでにこの最初の時期から、(錫含有量の少ない)青銅製ソケット付きの槍先や青銅製腕輪・足輪が出土している。Ⅲ期では曲線文を刻んだ縄目土器と磨研土器が見られ、また若干の青銅製品が出土している。Ⅳ期でも縄目土器が見られるが、その肩部を磨研して刻線で曲線文や幾何学文を描き、その内側に赤で彩色を施した一種の有刻彩文土器(オムケオOm Keo式土器)が特徴的である。この時期、豊富な青銅器が伴う。またこの時期には、銅柄鉄刃の槍先や、鉄製の輪をかぶせた青銅製腕輪が出土していて、鉄器出現期の様相と考えられている。

V期になると、クリーム色のスリップをかけ、華麗な渦巻文の赤色彩文をほどこした彩文土器が見られる。これがバンチェン文化を有名にした、いわゆるバンチェン彩文土器である。この時期、青銅器と鉄器の

冶金術は継続し、また副葬品の豊富な厚葬墓が見られる。VI期になると、粗雑な赤いスリップをかけた土器が見られる。

以上のことからすると、土器の様相については、おおまかにいって黒色刻文土器→刻文+彩文土器(有刻彩文土器)→彩文土器という盛衰の順序が確認できる。クリーム色のスリップをかけた典型的なバンチェン彩文土器は、おもに鉄器時代の遺物であり、青銅器が出現した頃の特徴的な土器は黒色刻文土器ということになる。しかし、量博満氏や今村啓爾氏が指摘するように、①縄目だけの粗製土器は、Ⅰ・Ⅱ期以降どれほど継続存在したのか。②初期の発掘報道のあるものには、Ⅰ・Ⅱ期にもある種の彩文土器が伴うとする記述が見られる。彩文土器が鉄器時代に盛行するのは確かだとして、古くはどこまで遡るものなのか。③バンチェン遺跡には青銅器出現より以前に新石器時代の文化層があるとする初期の発掘報道もある。では実際はどうか。以上のような問題が十分解明されないまま、今日にいたっているといえよう。(西江)

4 土器の記載と若干の観察所見

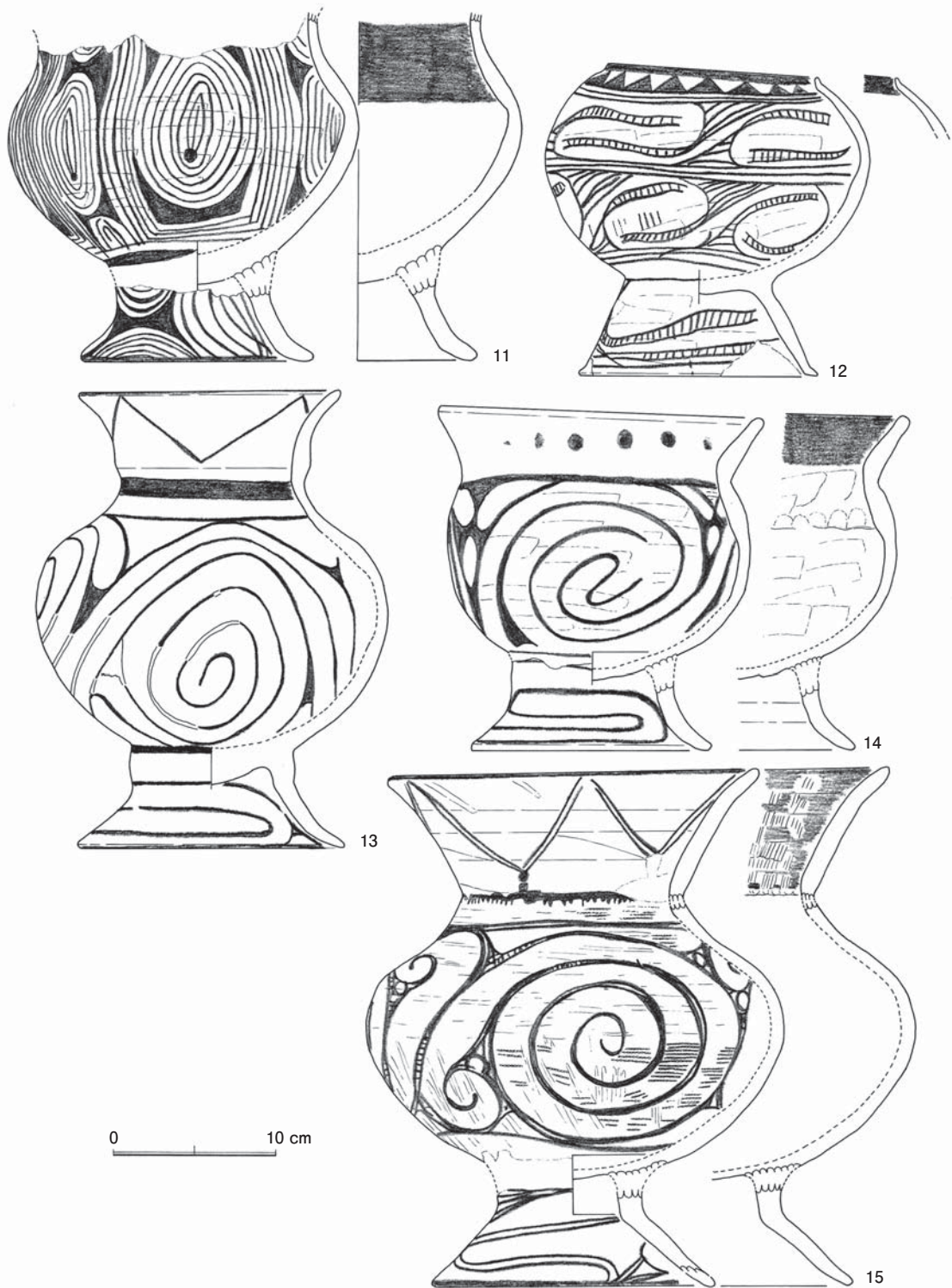
今回、寄贈された土器は15個体である(第1図、第2図)。バンチェン土器については、量博満氏により基本的な検討と、問題点の整理がなされている(量1977)。ここでは、量氏の分類にしたがって、黒色系土器・加彩黒色土器・有刻彩文土器・彩文土器の4つに分けて記載した上で、若干の観察所見を述べたいと思う。

(1) 黒色系土器(第1図1~3)

1は、小型の鉢形で全体が黒色に仕上げられた、正に黒色土器にふさわしいもので



第1図 土器実測図(1)



第2図 土器実測図(2)

ある。高さ 9.7 cm、口径 10.2 cm を測る。口縁部は平らで、底部は丸底を呈している。口縁部より 1 cm ほど下がった位置に頂部がやや丸みを帯びた断面三角形の突帯を貼付している。突帯より上の口縁部にはヨコナデが施され、突帯より下の胴部には縄目文様がある。この縄目文様は、いわゆる縄蓆文とされるもので、回転圧痕ではなく、叩き板に縄を巻きつけて土器面を叩く、叩き技法によって施されたものである。突帯直下で、突帯貼付の際のナデで縄目が消えているので、突帯貼付に先立って縄蓆文が施されたものである。

内面は、口縁部にヨコナデ、その下部にヘラミガキ、粗い研磨、胴下部から底部にかけてはヘラケズリがなされている。

2 は、壺形をなし、やや灰色がかかった褐色に仕上げられた土器である。高さ 17.7 cm、口径 11.2 cm、胴部最大径 17.1 cm、底径 5.4 cm を測る。口縁部は外反するが短く、最大径を中心よりやや下にもつ下膨らみの胴部に至る。底部には高さ 7 mm ほどの輪状の高台がつく。

胴中央には低い断面三角形の突帯が貼付されるが、1 周することはなく、1 箇所まで垂下して終わる。突帯の両側は貼付の際にヨコナデされ、部分的に凹線状に凹む。

突帯より下部には縄蓆文が残るが、縄蓆文が突帯貼付時のナデで消されていること、口縁部から胴部上半にかけてもナデによって消されてはいるが縄蓆文が確認できることから、本来は全体に縄蓆文が施されており、口縁部・頸部のヨコナデと胴上半のナデ整形によって上部の縄蓆文が消され、さらにその後、突帯が貼付されたものと言える。なお、底部には縄蓆文は見られ

ず、渦巻状にケズリを施している。

3 は高台付壺形土器で、灰色がかかった暗褐色を呈する。高さ 16.1 cm、口径 15.6 cm、胴部最大径（突帯を除く）14 cm、高台径 9 cm を測る。口縁部は大きく外反し、頸部は長く、算盤玉状の胴部に接続する。高台は高さ 4 cm ほどで本来丸底の器形だったものに後から接合したものである。

胴部中位には断面三角形の突帯をめぐらし、その頂部にヘラ状工具で刻目を施している。口縁部にはヨコナデが施され、頸部は横方向のナデの後に縦方向にヘラ磨きされる。胴部上半は横方向にヘラ磨きされる。突帯よりも下部には縄蓆文が残るが、突帯の貼付によって消されているので、縄蓆文を施した後に突帯の貼付がなされたものである。ただし、胴部上半には縄蓆文の痕跡が認められないので、本来全体に縄蓆文が施されていたかどうかはわからない。また、壺の丸底の底部にも縄蓆文が見られるので、高台を付けるのに先立って、底部に至るまで縄蓆文が施されていたことは間違いない。

(2) 加彩黒色土器 (第 1 図 4・5)

4・5 の土器が量分類の加彩黒色土器に相当させうるかどうか、疑問に感じるところもあるが、一応これに含めて説明する。

4 の土器は、3 と同じ器形をしたものである。高さ 15 cm、口径 20 cm、胴部最大径 19 cm、高台径 13.3 cm を測る。口縁部は短く外反し、内傾した頸部に接続する。胴部中位から下部へは緩やかなカーブをもつ丸底の椀状を呈する。高台は高さ 4 cm を測る。

胴部中位には断面三角形の突帯をめぐらし、その頂部には棒状の工具で刻目を施す。

口縁部の整形はヨコナデの後に端部をヘラミガキする。頸部は横方向のヘラミガキが施されている。突帯より下部には縄蓆文が認められるが粗いミガキによって消されている。底部にも縄蓆文が見られ、その後に高台が付けられている。内面は頸部内面までをヘラミガキし、胴部内面下部はナデ整形される。

この土器の特徴は、口縁部から突帯上部までと高台部分を赤彩していることである。彩色部分全体を塗りつぶしており、図形的な文様を描いているわけではない。なお、赤彩は焼成以前になされているが、これについては後述する。

5の土器は、現状で浅いボウル状のシンプルな器形をなした土器である。高さ9.2 cm、口径18.7 cmを測る。「現状で」としたのは、底部に剥落痕跡が認められるからで、元々は脚台があった可能性はある。

口唇端部は面取りされている。外面はナデ整形されているが、器面の剥落が著しく、詳細には観察できない。赤彩は内面に施されているが、図形的な文様を描いているわけではなく、彩色部分全体を赤彩している。ただし、中央部付近では帯状に赤彩が剥落しており、何らかの使用痕跡であるかもしれない。

(3) 有刻彩文土器 (第1図6~9)

器形はいずれも口縁部が短く「く」の字状に外反する丸底のボウル形の土器である。6は高さ8.6 cm、口径12 cm、7は高さ12.9 cm、口径11.5 cm、胴部最大径14.1 cm、8は高さ11.8 cm、口径14.2 cm、9は高さ16.9 cm、口径16.5 cm、胴部最大径19.6 cmをそれぞれ測る。7は沈線を持たず、赤彩部位が口縁部内面であることから、

やや異質であるが、9と器形が共通しているのでこの類型に含めて記述しておく。

これらの土器は器形の共通性だけでなく、すべてが胴部全面に縄蓆文を施しており、縄蓆文の後に頸部への文様施文と口縁部のヨコナデを施している点でも共通している。特に、7・9は口縁部のヨコナデが顕著で、外面に凹凸が生じるほど強いヨコナデがなされている。

文様は7が口縁部内面の赤彩であることを除けば、他の3個体はすべて口縁の屈曲部直下に施文されている。6は沈線で区画し、その内側を赤彩した2条の帯が施されるが、8は2条1組の沈線帯を上下に入れ、その間に沈線1条で連続して山形文を描いている。さらに上部の沈線帯の中と山形文の下部には白色顔料が塗られ、山形文上部と下部の沈線帯間には赤色顔料が塗られている。施文の順番は、先に彩色し、その後に沈線による区画と山形文施文をしたものである。

9は、文様施文部の上端を1条の沈線で区画し、下端を2条1組の沈線帯で区画して、その間に山形文を描いている。白色顔料は使われていないが、赤彩部分は山形文上部と下部の沈線帯間である。この土器も彩色した後に、沈線を加えている。

なお、6と9の赤彩は焼成後になされたものであるが、8については黒斑との関係が観察できず、わからない。

(4) 彩文土器 (第1図10、第2図11~15)

バンチェン土器を代表する土器群であり、渦巻文をはじめとした複雑な彩文を特徴としている。

10は鉢形をしているが、底部は補修されており、もともとは脚台が付いていた可能

性がある。現状で高さ 11.2 cm、口径 22.1 cm を測る。口縁部は肥厚し、胴部の最大径は中位よりもやや上にある。現状の底部は底径 9.2 cm と比較的大きい。器面の調整は、口縁部はヨコナデされ、胴部は横方向にナデ整形されている。内面には成形時の接合痕が残り、口縁部がヨコナデされる以外はヘラケズリされている。

彩文は 3 単位の渦巻で構成され、渦巻と渦巻の間は全体を赤彩で塗りつぶしている。渦巻は中心点から 2 条 1 組で逆時計回りに展開し、隣接する渦巻とは入組文状に噛み合っている。底部付近には短線が連続して細長い格子状に施されている。彩文の施文は、焼成後であったらしく、焼成時の黒斑の上に彩文が描かれている。

また、一般にバンチェン土器の彩文土器は化粧地のスリップが施された後に施文されるとされるが、この土器についてはスリップがけされていない点は特筆されよう。

11 は台付の壺形になっているが、胴部以上と脚部は別個体である。脚部がついた状態での大きさは、高さ 21.1 cm、胴部最大径 22.6 cm、脚部径 14.4 cm を測る。全体に彩文で埋め尽くされているので土器面の整形ははっきりしないが、外面は横方向に研磨されており、また、この個体は彩文に先立ってスリップがけがなされている。

文様は胴部と脚部に分けて説明する。胴部文様は全部で 6 単位あるが、複線構成の方形枠の中に同心円状の楕円形をやはり複線構成で描いたモチーフと、方形枠を伴わず中央の同心円の上下に半円形の同心円（上部の同心円は半円とは限らない）を配置するモチーフを交互に描いている。同心

円の中心には下端に円文をおいて縦長の凸レンズ状の図形を描き、その中に縦の短い線を入れている。各単位の中心に描かれているが、6 単位中、1ヶ所だけ凸レンズ状図形の枠線から外に向けて短線をケバ状に派生させたものがある。

脚部は弧を向かい合わせた半円形の図形を複線構成で描き、その間を縦の弧線で埋める構成となっている。脚部では彩文に先立つスリップは認められない。なお、内面も赤彩されるが、その範囲は胴部最大径部分よりやや上までである。

12 は、複雑なモチーフをもつ台付の壺形土器である。高さ 19.3 cm、胴部最大径 20 cm、脚部径 14.8 cm を測る。口縁部は短く内傾して立ち上がる無頸壺で、最大径は胴部中位よりやや上にある。脚部はハの字状に大きく外反する。この個体は脚部・胴部ともに同一個体である。外面には縄蓆文がわずかに確認されるが、ナデによって消されている。したがって、外面の整形手順は縄蓆文→ナデ→スリップということになる。

文様は口縁部に連続した三角文を施すが、それ以下は一見複雑な文様をとっているように見える。全体としては 3 条 1 組の横線を三角文直下、胴部中位、脚部との接合部付近の 3ヶ所に描いて、2 段の文様帯を配置し、それぞれの文様帯に入組文を基調とした単位文様を描いている。複雑に見える理由は、単位文様が 2 条 1 組でその中を短線で区切る梯子状の表現をとっており、さらに入組文の付根部文も、彩文で埋め尽くすのではなく、やはり間隔を空けながら短線で充填しているために、線の数が多く見えることにある。脚部も文様モチー

フは異なるが同様の描き方をしている。内面は、口縁部の屈曲よりやや下まで赤彩されている。彩文は焼成後に施されている。

13～15は10～12に比べるとシンプルな渦巻文を主文様とする台付壺形土器である。いずれも彩文が焼成後になされている点でも共通している。

13は、高さ28.3cm、胴部最大径22.4cm、脚部径16.4cmを測る。口縁部は大きく外反し、最大径を胴部中位よりやや上にもつ肩の張り気味な器形をなしている。脚部は接合部付近が円筒状になり、裾部に向けて大きく開く形である。器面整形は、口縁部がヨコナデされ、胴部は横方向に研磨されている。縄蓆文は確認できないが、おそらく研磨に先立って縄蓆文が施されていたであろう。彩文に先行してスリッパがけがなされている。

文様は基本的にすべて単線で描かれている。口縁部に大振りな山形文を描く。胴部は頸部の屈曲部分と脚部との接合部分に横線を引いて区画し、その中に時計回りの大振りな渦巻を主文様として描いている。また、この個体の文様には、部分的に後での書き足しが見られる（図で白抜きとなっている箇所）。

14は胴部以上と脚部が別個体である。現状では、高さ21.3cm、口径20.1cm、胴部最大径18.8cm、脚部径14.9cmを測る。口縁部は短く外反し、最大径を胴部中位にもつやや潰れた球形の胴部に続く。胴部に縄蓆文は確認できないが、底部には見られるので、縄蓆文が施されていたことは間違いない。その後に、横方向のナデもしくは弱いケズリがなされている。口縁部はヨコナデされている。内面には成形時の接合痕

が見られ、その上部に指で抑えた凹みが生じている。その後、胴部中位以下はヘラケズリしている。

文様は、口縁部に円文を横に並べ、胴部は頸部の屈曲部分と脚部との接合部分に横線を描いて区画文としている。主文様である渦巻文は2条1組で時計回りに描かれている。全体にシンプルなモチーフとなっているが、隣接する渦巻文と接する箇所ではやや複雑な文様構成となっている。脚部の彩文は工字文状に入り組んだ文様となっている。彩文は焼成後になされたものであろう。

15は口縁部・胴部・脚部が別で、3個体が合成されているものである。現状で、高さ32.1cm、胴部最大径25.6cm、脚部径17.4cmを測る。口縁部外面はヨコナデを施しているが、布などを当てて一気に1周しているように見える。内面には叩きによる条線と思われる痕跡が残る。胴部には縄蓆文が見られその上を胴部上半では横方向のナデ、下半では粗い研磨を施している。その後にスリッパがけを施して彩文をしていることになる。脚部は丁寧に研磨されており、胴部とは明らかに整形の仕方が異なる。

文様は、密接した2条1組の線で描かれている。口縁部には13とよく似た大振りの山形文を描き、口縁端部にも幅狭く赤彩をしている。胴部は頸部の屈曲部分と胴部下半に横線を描き、文様帯を画している。その中に時計回り方向で渦巻きを描くが、隣接する渦巻きと接する部分では14と同様に複雑な文様構成となっている。また、密接した2条の線の間には12で見られたような短線によって梯子状とするような描

き方がとられ、そのことが文様を複雑に見せる一因となっている。脚部はやや間隔の空いた2条1組の線で縦に蛇行する文様を描いている。全体に彩文に先立ってスリッブがなされているが、口縁部、胴部、脚部で発色が異なっており、そのこともこれらがもともとは別個体であると判断した理由である。

(5) 若干の観察所見

① 縄蓆文について

一般に、バンチェン土器の成形技法は拍打法(叩き技法)によっているとされる(量1977)。実際に土器の外面には縄目が残されており、詳細に観察するとそれが日本の縄文土器の縄文のような回転圧痕ではなく、押し付けた痕跡であることは明らかであるため、叩き技法をとっていたことは間違いない。そのことは量氏が指摘されるように器形の丸底化とも関連付けられる。

しかし、一方で、土器内面の観察から明らかに成形時に粘土紐を積み上げたと考えられる事例(7・14)もあるため、量氏らが言うように「円筒状の段階の器形を拍打して成形した」という成形技法をとったとは考えにくい。実は、この方法は今日の東南アジアにおける土器作りの民族例でも見られる技法であり、これを指摘したファン・エステリックやピリヤー・クライリックスがそのことを知っていて類推した可能性を考慮すべきかもしれない。ただし、こうした成形技法を取った場合、原型となる円筒およびその製作工程を製作物の上では確認できなくなることは、すでに榎崎彰一によって指摘されている(榎崎、Cort、Lefferts Jr. 2000)。

結論から言えば、本コレクションのバン

チェン土器を見ている限りでは、1の黒色土器を除いて、積極的に成形に叩き技法が取られていたと認める証拠はないといって良い。もちろん、縄蓆文が残されているので、製作工程のある段階で縄蓆文が施されたのは疑いないが、それは最終的な仕上げの段階で装飾的に施された可能性があるのではないだろうか。筆者によるカンボジアでの土器製作の民族調査においても、装飾的に土器外面に叩き痕を残す土器製作者がいたことを確認しているので、装飾として縄蓆文が施され、残された可能性は排除すべきではないであろう。

② 彩文のタイミングについて

量氏はバンチェン土器の彩文がいつ描かれたのかについて、極めて重要な指摘をされている。彩文がなされるのは、土器を焼成する以前であると考えるのが普通であろう。しかし、量氏は彩文が焼成前に描かれていると指摘されているのである(量1977)。

確かにそうした目で彩文の状態を観察すると、4と10の個体で焼成時の黒斑の上に赤色顔料が塗られていることが確認でき、ほとんどの彩文もしくは赤彩された個体が焼成後の彩色であることが確認できる。ただ、11のみは赤色顔料が黒変している箇所が見られることから、焼成前の彩色である可能性が高いと思われる。

③ 型式学的な関係性について

今回報告した15個体の土器は、個体数は少ないながらもバンチェン土器の特色をよく表したコレクションであり、バンチェン土器の時間的な変遷に型式学的な見通しを与えうる資料と言えるかもしれない。そこで、ここでは大まかではあるが、本コレ

クシヨンの型式学的な関係性について、簡単に触れておきたい。

まず、型式学的に最も先行する可能性があるのが1・2・3の黒色土器であることは、多くの先行研究が指摘している。このうち、3の高台付壺形土器は東南アジアにおいて非常に長い時間継続する器種であり、そう言う意味では時間的な限定が難しい。しかし、この器形は東南アジア考古学でいうサフィンーカラナイ類型 (the Sahuynh-Kalanay tradition) と共通し、しかもサフィンーカラナイ類型の土器から沈線文で描かれた文様を喪失したものとみなせば、これをその後継型式に位置づけることは可能であろう。

黒色土器に続くのが加彩黒色土器であり、それに続いて有刻彩文土器、彩文土器と続く。このうち彩文土器については彩文で文様を描くもの(12~15)と、彩色部分と彩色されない部分とが反転して、空間を彩色で埋め尽くすような文様の描き方をしているもの(10・11)との2種類がある。10の土器の渦巻文は隣接する渦巻文との入組み方が、やはりサフィンーカラナイ類型の入組み文と似ており、それを前提とするならば彩文土器の中で10が型式学的に先行するということになる。そして、これにシンプルな渦巻文をもつ一群が続くことになるが、その中でも最も複雑な文様をもつ12と、シンプルな渦巻文となっている15は2条1組の線での文様の描出と2本線の間には短線をいれて梯子状にする点で共通する。そして15の渦巻文が、隣接する渦巻文との境界で小さな渦巻文を派生させて複雑化させている構成は14に受け継がれているとすれば、ここで12→15→14

→13の順で型式学的な関連付けをすることができる。

ただし、系統的に見れば、11・12は渦巻文を主文様としていないので、別な系統と見なければならぬ。さらに12の入組み文もサフィンーカラナイ類型の文様と共通するものとみなせば、10とともにその系譜下で理解することができ、系統的な連続性は遠いかもしれないが、梯子状の表現をとるなどの共通点を重視して、12が13~15に先行するとみなすことは許されよう。

このように、本コレクションは数としては決して多くはないものの、バンチェン土器を分析をする上では格好の材料を提供してくれていると言えそうである。(黒沢)

5 バンチェン遺跡とタイ東北部先史遺跡の年代問題

1974~75年の第2次発掘調査にもとづくバンチェン遺跡の各期について、発掘担当者は、当初18例の¹⁴C年代を公表し、I・II期が3600~2900 B.C.、III期が2000 B.C.、IV期が1600 B.C.、V期が1000~500 B.C.、VI期が300~250 B.C.と論じていた。この年代観こそ、同じ頃調査報告が出されていたタイ東北部ノンノクタ遺跡の年代とともに、ソールハイムらが提唱したモデルにより、東南アジアの青銅器や鉄器の出現が中国やインドより古く、かつ独自に出現したとする主張となり、学界を揺るがす問題提起となったのである。本稿でこの問題を回顧することはしないが、今村啓爾氏は青銅器の開始期について、タイ西北部の新石器時代に属するバンカオ遺跡の1300 B.C.という年代を重視し、一方鉄器の出現については中国大陸からの伝播を考え、雲南・ベ

表1 バン・ノン・ワット遺跡の放射性炭素年代

A summary of the prehistoric chronology for the upper Mun Valley, based on the radiocarbon determinations for Ban Non Wat, Ban Lum Khao and Noen U-Loke. (Higham・Higham 2009、表2より)

Cultural period	Date in calibrated radiocarbon years (BC)
Flexed burials	1750-1050
Neolithic 1	1650-1250
Neolithic 2	1250-1050
Bronze Age 1	1050-1000
Bronze Age 2	1000-900
Bronze Age 3	900-800
Bronze Age 4	800-700
Bronze Age 5	700-420
Iron Age 1	420-100
Iron Age 2	200-AD 200
Iron Age 3	AD 200-400
Iron Age 4	AD 300-500
Early Historic	500-

トナム北部の状況との整合性に注意して、バンチェンⅣ期の鉄器を前2～1世紀頃と推測した。

1980年代以降、バンチェン遺跡やノンノクタ遺跡からあらたな¹⁴C年代等が公表され、また、バンチェン村西南22kmのバンナディ遺跡をはじめとするタイ東北部でのあらたな遺跡の調査が進められた。くわえて東南アジア大陸部各地での先史時代遺跡の調査例も増加するなかで、かつてのバンチェンやノンノクタの年代観はそのままで受け入れられないものとなっていった。

新田栄治氏はそうした諸状況を総括して、タイ東北部における青銅器の出現を前2千年紀後半以降、鉄器については「直接製錬」による製鉄が前3世紀までにはまっていたと論じている。

近年、オタゴ大学のチャールズ・ハイアムらは、2002年に開始されたタイ東北部コラート高原の先史時代遺跡であるバン・ノ

ン・ワット (Ban Non Wat) の調査で得られた76点の¹⁴C年代 (おもに墓からの試料) について、Bayesian model (最新の統計学的モデル) で処理した解析をおこない、最終的には表1のような結果を得たとする (Higham・Higham 2009)。それを要約してハイアムらは、タイ東北部では狩猟採集民 (屈肢葬) につづき、新石器的な活動 (家畜・植物栽培) が前2千年紀の前半以降にはじまり、その後比較的短期間の後に青銅器文化が出現し (前2千年紀末以降)、さらに前5世紀頃には、鉄器技術の開始が見られるとする。ハイアムらはこの年代観と先史文化論のモデルを、東南アジアの先史時代全体の議論に広げようとしているようにもわれる (Higham 2013)。

新石器的な社会の開始という問題を、仮に稲作の開始と関連づけるならば、この年代観はかつて横倉雅幸氏が予想した年代観 (横倉 2001) に近いものであり、青銅器の

はじまり、鉄器のはじまりに関しては、今村氏、新田氏ら日本の研究者が予想してきた年代観に、おおよそ一致する認識へと収斂してきたといえるかもしれない。

この最近の成果をふまえつつ、バンチェン遺跡の土器の年代についてまとめておこう。バンチェン遺跡出土の、黒色刻文土器、彩文土器など各種の土器の消長と、(新石器時代末期)→青銅器時代→鉄器時代との年代的対応関係について、現状では確実なことは何もいえない。

しかしそもそもバンチェン文化とは、おもに青銅器時代から鉄器時代の遺物に対応した概念であるとするれば、ハイアムらの最新のモデルを参照するかぎり、その大部分が前2千年紀末以降、主として前1千年紀の遺物群であると考えなければならない。そのなかで、バンチェンを代表するクリーム色スリッがけの彩文土器は、鉄器が開始される前1千年紀後半(前5世紀頃以降)に中心があると考えるのが妥当である²⁾。

一方、黒色刻文土器はそれより古くから盛んであり、おそらく青銅器が開始される前2千年紀末以降から前1千年紀前半を中心に盛行したと考えることができよう。そしてもし仮に、バンチェン遺跡最下層に新石器時代の文化層を認め、そこに縄目土器や黒色刻文土器が伴うと想定した場合は、ハイアムらのモデルを参照して、その年代は前2千年紀前半頃まで溯る可能性もあろう。(西江)

註

- 1) たとえば、「タイ発見の最古の青銅器・彩色土器文明」『朝日アジアレビュー』1972年第4号。ニコム・スティラック

(吉川利治訳)「先史時代発掘調査報告：タイ国ウドンターニー県ノーンハーン郡バーンチェンに於ける先史遺跡の発掘報告」『民族学研究』38巻2号、1973年9月。チン・ユードイー(中沢郁子訳)「先史時代におけるバンチェン文化(資料)」『朝日アジアレビュー』1974年第2号。小林知生・量博満・山口修「タイの先史文化—現地に見た文明の刻印」『朝日アジアレビュー』1974年第2号。以上のようなものがある。当時の日本国内における、東南アジア先史考古学への高まる熱気のようなものが感じられる。

- 2) 量博満氏は、1977年の「バンチェン文化」(量1977)のなかで、かつてタイで最古式の銅鼓(先ヘーガーI式銅鼓)にバンチェン彩文土器が固着した状態のものを実見したと記録している。このタイプの銅鼓は、雲南地方では前5~3世紀の年代が与えられるものであり、ここでの結論とも整合的である。

参考文献

- 今村啓爾 1982「バンチェン文化の古さ」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第1号、215-234頁。
- 太田豊人 1977「あとがき」『バンチェン陶大観』雄山閣出版、471-472頁。
- 坂井隆 2007「世界文化遺産から見た東南アジア」『地域の多様性と考古学—東南アジアとその周辺—』雄山閣、383-399頁。
- 坂井隆・西村正雄・新田栄治 1998『東南アジアの考古学』同成社。
- 檜崎彰一・L.A. Cort,・H. Leedom Lefferts Jr. 2000「東南アジア本土における現代の土器

- および焼締陶の生産に関する地域調査』『財団法人瀬戸市文化財センター研究紀要』第8輯。
- 新田栄治 2001 「金属器の出現と首長制社会の成立」『岩波講座 東南アジア史 1 原史東南アジア世界』岩波書店、83-110 頁。
- 量博満 1977 「バーンチェン文化」『バンチェン陶大観』雄山閣出版、425-469 頁。
- 東南アジア考古学会 1981 『東南アジア考古学会会報』第1号。
- 横倉雅幸 2001 「東南アジアにおける稲作の始まり」『岩波講座 東南アジア史 1 原史東南アジア世界』岩波書店、55-81 頁。
- Higham, C.F.W. 2013 *The Origins of the Civilization of Ankor*, London, Bloomsbury.
- Higham, C.F.W. and Higham, T.F.G. 2009 A new chronological framework for prehistoric Southeast Asia, based on a Bayesian model from Ban Non Wat. *Antiquity* 83: 125-144.

Recent donation of Ban Chiang pottery: “Yuko Yamaguchi Collection”

NISHIE Kiyotaka
KUROSAWA Hiroshi

This paper reports newly obtained 15 items of Ban Chiang pottery which were donated by Mrs. Yuko Yamaguchi (the wife of late Professor Osamu Yamaguchi, a specialist of Oriental history). Ban Chiang pottery is the name for a family of earthenware found at Ban Chiang Village located in north-east Thailand in 1960. A huge amount of bronze wares and beautiful painted pottery had been widely known since the time of discovery. Researchers first dated the findings as being made around the fifth or the fourth millennium BC, widely notified as the earliest bronze culture of the world. The identification, however, was modified as the study of Ban Chiang culture progressed, and then, the characteristic painted pottery is now thought to belong to the Iron Age. The chronology was also widely modified. According to the recent studies by C.F.W. Higham and others, the cultural shifts occurred as follows; the culture of hunter-gatherer (adopting contracted burial) appeared first, the Neolithic activity (domestication) started after the first half of the second millennium BC, the bronze culture appeared after relatively short term (after the end of the second millennium BC), then the use of iron seems to have started around the fifth Century BC.

Based on former studies, the authors, thinking that the most parts of Ban Chiang pottery belong to the period after the end of the second millennium BC (mainly, the first millennium BC), concluded that it is appropriate to suppose that the painted pottery flourished at the beginning of the Iron Age, that is, in the second half of the first millennium BC (after around the fifth Century BC).

平成 26 年 3 月 16 日 印刷

平成 26 年 3 月 22 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 32 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館
466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
TEL 052(832)3111 (代表)

印 刷 株式会社クイックス
456-0004 名古屋市熱田区桜田町 19-20
TEL 052(871)9190